

俳句雜誌

令和五年十一月一日發行（每月一日發行）通卷第九十六卷第十一号

# 水 明

2023 11月号



《今月のかな女》

雀殖ゆる小春の庭をたのしみぬ

(句集『龍膽』)

長谷川かな女

子供の頃から鴉や鳩と同様に身近に居る鳥の一つであった雀を見ることが希になった今、掲出句を読んで、人の周りに自然が沢山あったかな女の時代を羨ましく思った。稲刈りの時期には東京近郷の田圃にいた雀たちが住宅地に戻ってきたのか、初冬の庭を賑わしている。パン屑や飯粒を与え、ひと時を雀と遊んでいるかな女の微笑ましい姿である。

(鬼之介・註)

# 水 明

第1118号

— 華の一句 —

恋の字の変に見えたる秋初め

吉川 拓 真

本句を読んで、筆者が若い頃に聴いた四代目・柳亭痴楽の落語を思い出した。たしか「ラブレター」という演目であったかと記憶しているが、おっちょこちょいの男が書いたラブレターの文面の「恋しい恋しい」が「変しい変しい」になつていたという話で、大笑いした。世代の違う作者には縁のないことだと思ふが、連日極暑が続いた夏の疲れが出た秋口であったのか。俳句を書く上での誤字は厳禁。  
(鬼之介・推薦)

# 水 明

令和 5 年

11 月号

今月のかな女

華の一句

烈風 (作品)

新学 期 (近詠)

三方石観音 (近詠)

百尺竿頭 主宰作品の鑑賞

ゆずり葉 季音月評

季音「雪」 (同人作品)

季音「月」 (同人作品)

季音「花」 (同人作品)

『水明誌』を繙く

現代俳句鑑賞

俳句と私

自選五十句

城子の一番弟子

乙女の一句

初花の一句

作家津島

初花の一句

森本早苗 矢作水尾  
山中みどり ほか

大場順子 池田雅夫  
正木萬蝶 ほか

日高道を 青木鶴城  
曲淵徹雄 ほか

山本鬼之介

柚木治子

鳥羽和風

五明 昇

檜鼻ことは

12

19

24

29

30

32

34

38

40

42



新季音同人（わたしの近詠二句）

十月号の巻頭句

水明集

菅原真理  
越田栄子  
小林京子  
ほか

水明集作品評

山本鬼之介

水琴窟（水明集九月号鑑賞）

池田雅夫

鼓笛集（同人作品）・私の一句

染谷風子

俳誌望見

越田栄子

山紫集

曲淵徹雄

りんどう忌の記

78

句集喝采

77

水明例会報・各地句会報

81

新珠賞作品募集

86

日めぐりカレンダー

87

風声・発展基金御礼

88

後記

90

題字：長谷川かな女 表紙：内田恵子 カット：福田千春

---

---

# 烈風

山本鬼之介

深窓に御簾のごとくや秋すだれ

ぬけぬけと一人三役村芝居

本膳や食はず嫌ひの菊脛

---

松皮剥ぐこれぞ故郷の黍嵐

秋うらら古美術商の鼻眼鏡

活魚の生簞に充つる秋思かな

案山子が見えたやつと会へたぞ一輛車

真つ直ぐに引けぬ白線秋惜しむ

# 新学期

柚木治子

少年に校門遠し休暇明け  
少年や勇気出せよと石榴一つ  
秋の校庭海思はするソーラン節  
見守りの放送ひびく鰯雲  
天女めく芙蓉にまぶれつく児童  
母に似る丸い時計と望の月  
背すぢ伸ぶ竹刀の音や夜の秋

学校の塀づたいにハガキを出しに行く朝の出来事であった。曲がり角でランドセルの高学年の少年とぶつかりそうになり、今日が始業式だと気付く。しかし授業はすでに始まっており、ああ!!そうかと分かる。校門と曲がり角を行きつ戻りつする少年の胸中を思いやれば声をかけて良いのか悪いのかも判断がつかず少し離れて見守る。

やがて警備員さんが気付き、先生が迎えに來られて背を抱くようにして校門に消える。それを見届けてポストへ急ぐ私。今日少年が学校で楽しいことがありますようにと祈りながら……。



# 三方石観世音

鳥羽和風

竜が噴く観音霊水岩清水  
静けさや御堂にひびく鹿威し  
秋嶺の秘仏に啼くや石の鶏  
六万の手形足形秋の山  
提灯に金田正一花梨の実  
苔むした鶏鳴石や秋時雨  
観音川堰一線に秋の水

三方石観音は国道二十七号線から観音川の溪流沿いに続く情趣に富んだ参道を上った所にある。この観音像には右の手首がなく、若狭遍歴の途中ここに立ち寄った弘法大師が彫り始めたものの夜が明け妙法石から鶏の声が聞こえたため完成させずに立ち去ったと伝えられています。片手のない観音様は何時からか手足の不自由な人達の信仰を集めるようになりまし。本堂は観音像が彫られた花こう岩を背負うように建てられており秘仏として祭壇の奥に閉ざされた本尊は三十三年に一度しか拝観する事が出来ません。本堂前の御手足堂には手足を形どった木片が金色の観音様の周りにうず高く積まれています。昔から手足を病む人はこのお堂にある手足の型をお借りして病む所をさすると治ると信じられて。今日まで多くの信者が参拝に訪れます。

# 百尺竿頭

● 主宰作品の鑑賞

五明昇

八月号

## 虫干や柳行李の使ひ道

梅雨明けの晴天の日に、柳行李に収納してある衣類などを陰干しして湿気を取り、黴や虫の害を防ぐ虫干は、かつては土用の年中行事であった。防虫剤や湿気取りの普及で虫干もなくなつたが、使い勝手の良い収納具として、日本人の簡素な暮らしの証明でもあつた柳行李は、後にブリキ、収納ケースと形を変えながら今も生活の中に根付いている。

## 麗しき翠巒迫る秘湯かな

秘湯とは、アクセスの良くない山奥や大自然の中にひっそりと存在する温泉や宿のことだ。「日本秘湯を守る会」には現在会員宿一八五軒が登録されている。静かな温泉宿に行きたい、ただただじっくりと温泉を楽しみたい……。人里離れた隠れ里のような温泉宿の窓辺には、緑色に連なる手付かずの山脈が圧倒的な勢いで迫ってくる。

## 俳号はまさに二つ名夏あざみ

「二つ名」とは「本名や正式名称ではないが、対象を一意に指す名称として一般的に用いられている呼び名」で、異名通り名などのこと。俳句の雅号である俳号も、これを付けることで自分ではないもう一人の自分を手に入れることができ、まさに「二つ名」の効用を得ることに繋がる。春や秋の薊とは異なる生命力溢れる夏薊と響き合う一句だ。

## 誰を待つやら三条小橋組を召して

三条小橋はその名の通り、東海道五十三次の西の起点である三条大橋の西側にあり、高瀬川にかかる小さな橋。橋は小さいが、通称「さんこば」と呼ばれる三条小橋商店街には昔の賑わいが戻りつつある。その小橋のもとに組の着物を召して佇む佳人。維新史の舞台となった木屋町界限に、一場の人情劇が繰り広げられそうな気配だ。

## 命あるごとく消えゆく二重虹

虹は自然のパワーが作り出す現象で、その力強さから世界中で幸せの象徴とされてきた。とりわけ二重の虹「ダブルレインボー」は、虹のそれぞれに「卒業」「祝福」という意味があり、幸運の前兆と信じられている。夕立ちの後に忽とし

て出現した二重虹が、人々に喜びや希望を与え、やがて遠山の彼方に消えて行くさまは、ドラマチックで神々しい。

## 九月号

噴水や先づはウインナーワルツから

音楽と光と水を完璧に調和させ、様々な形や動きの噴水が人々に感動を与える「音楽噴水ショー」が各地で人気だ。身近な所では北浦和公園の音楽噴水が有名で、クラシックやジャズの曲に合わせて躍動する噴水が楽しめる。ウインナーワルツは、十九世紀のウイーンで流行した室内ダンスのためのワルツで、その速いテンポは音楽噴水にうってつけ。ショーのオープニングはまずは「美しき青きドナウ」といきたい。

昼寝する小言幸兵衛その夢は

小言幸兵衛古典落語の演目の一つで、世話好きだが口やかましい家主が、家を借りに来た人々をさまざまな理由をつけて断わるおかしさをねらう。その幸兵衛を昼寝させ、夢の行方を問う作者の斬新な着想に感服する。江戸時代の家主は万一の場合、店子との連帯責任を負わされることが決まりで、店子の選択には相応のストレスも溜まっていた。昼寝の夢はそんな幸兵衛の一時の気散じだったのかも……。

憧るるひとの夏帽深みどり

夏帽は夏にかぶる帽子で、麦藁帽やパナマ帽も夏帽子であ

るが、どちらかと言えば、女性のかぶる鰐広の帽子にその印象が強い。それも白でなく「深みどり」となれば、一段とクラシカルな落ち着きを感じさせる。深緑は青みと黒みの強い濃緑色のことで、平安時代には朝廷への出仕に着用する朝服の六位の色とされた。深緑の夏帽を目深にかぶった憧れの人には、近寄り難い凜とした気品が漂っている。

「岸壁の母」のがんばり土用波

岸壁の母とは、ソ連による抑留から解放され、引揚船で帰って来る息子の帰りを待つ母親をマスコミ等が取り上げた呼称で、流行歌や映画でも一世を風靡した。舞台となった京都市舞鶴市の引揚棧橋を見下ろす丘の上には舞鶴引揚記念館が建ち、「岸壁の母」の歌碑も設えられている。岸壁に打ち寄せる土用波は、総計六十六万五千人にも及んだ舞鶴地区復員者と、ついに帰還の叶わなかった人たちの想いをのせて重く揺蕩っている。

自転車の巡査を招く稲の花

交番や警察署で見かける「白チャリ」(警ら用自転車)は、前輪部分に取り付けられた筒状のケースと座席後部にある書類ケースが特徴で、警察官が主にパトロールをする際などに使用する。今、巡回中のお巡りさんが自転車で通りかかると、田圃の稲の茎に白い小さな花が穂のように群がり咲き、見事な光景が広がっている。稲の花は国歌安寧の礎、本日の巡回日誌には「異常なし」と書かれることになる。

# ゆずり葉

◆季音九月

檜 鼻 ことは

## 冷酒のとりり濃紺江戸切子

山中みどり

「器は料理を供すのに欠かせないものである。料理の味や香り、盛り付けなどを引き立てる。器は、料理の魅力を引き出し鮮やかに彩る服のようなものである」とは北大路魯山人が残した有名な言葉。料理は器からと言うけれど、お酒もまたしかり、品のいい酒器でいただくお酒は美味しいことこの上ない。日本酒は、熱燗、ぬる燗、冷や、冷酒と様々な飲み方があるが、夏なら冷酒でキレのある風味を楽しみたい。さて、江戸切子でいただく冷酒なんて、なんと贅沢で優美な時間。濃紺の江戸切子にとろりと注がれる吟醸酒、お料理もさぞや美味しかったことであろう。

## 白うちは独り将棋の奥座敷

柚木治子

詰将棋なのかそれとも棋譜並べをされているのかは知らな

いが、相当な腕前をお持ちの方なのだろう。誰にも邪魔をされない奥座敷で過ごす独りの時間。

静かな空間に、時折、駒を置く音だけが響く。団扇をあおぎながらの長考も心地よい独りの時間である。団扇も、いろいろな色やデザインのものがあるが、ここはやはり無地の白うちわがしっくりとして場に似合う。喧騒から離れた奥座敷にて、白うちわを手にしながらの独り将棋。何とも優雅な時間である。掲句のもつ静かで凜とした風情が何とも心地よい。

## 日の盛り上ル下ルの京の町

梅澤佐江

「京の底冷え」という言葉があるように京都の冬は寒い。これは三方を山に囲まれた盆地のような地形にあることがその一因らしいが、夏もまた暑いのが京都である。「日の盛り」と聞くだけで京都の夏を思い出す。

平安京が置かれた京の通りは、東西と南北の通りが交わる碁盤の目になっていて、「上る・下る」「東入・西入」は、こ

の碁盤の目の通りの行き来をわかりやすくした京都独特の住所の表記である。

「上ル下ルの京の町」とは何とも旨い切り口。しかもリズムカルで、暑いながらも京の旅を楽しまれてい作者の姿までが伝わってくるようだ。

母の忌や朝顔に水惜しみ無く 高島寛治

朝顔は「一日花」なので、朝咲いた花はその日のうちに萎んで終わってしまう。その一方、新しい花が次々と咲いてくるので、毎朝の水遣りは楽しみなことこの上ない。

朝起きると仏壇に参り、それから、水遣りをされるのが作者の日課のひとつとなっているのではと想像する。生前はお母さまも朝顔への水遣りを楽しんでいたのではないだろうか。命日の朝、いつもの如くの水遣りだけれど、今日は、亡き母への思いを込め、あんなこともあつたこんなこともあつたと母と過ごした日々を思いつつの朝であつたのでは。

二人居の風と思へば団扇かな 青木鶴城

今でも多方面でご活躍のことと思うが、それでも家庭や仕事で重責を担って忙しくされていた四十代、五十代のころに比べると時間の上でも気持ちの上でも余裕ができ、二人の時

間を楽しまれていた仲睦まじいご夫婦の姿が浮かぶ。まつたりとお二人で過ごされている居間であろうか、心地よく優しく感じた風は奥様がおおぐ団扇の風であつた。

扇風機どころか部屋には必ずエアコンがあるのが当たり前となつた時代。団扇や扇子を使う機会が少なくなってきたけれど、扇子は自分をおおぐもの、うちわは人をおおぐものとして生まれたのだそう。奥様のおおぐ団扇の風は、ご主人を思いやる気持ちがおおぐられているのだ。何とも羨ましい光景である。

溪流釣りみやげは魚籠の花山葵 河野はるみ

木々の緑、川のせせらぎ、野鳥のさえずりなど自然を満喫しながらの溪流釣り、楽しいだろうなあと聞いただけで憧れてしまう。溪流に生息する魚と言えば、ヤマメ、イワナ、ニジマス、アマゴといったところだろう。釣れた後は、ヤマメならもちろん炭火を使った塩焼きが一番。脂のたまつた頭、ふわふわの身、すべからく美味しくいただける。こんなことを妄想していたら、みやげは花山葵ときた。まさか、釣りの方はさっぱりということはなかっただろうから、花山葵のおまけ付きなら最高である。もちろん花山葵だけでもとっても幸せ。さぞや美味しい夕食を楽しまれたことだろう。

季  
音  
雪



萩の風  
森本早苗

萩の風纏るる蝶を道づれに  
母在らば百と二十よ今日の菊  
秋うらら繋ぐ手と手の睦まやか  
秋彼岸きな粉もたんと召し上られ  
万物の疲れてをりぬ虫の音も

大漁旗  
矢作水尾

大漁旗岬を指して鰯船  
秋簾美しき京菓子京言葉  
一片の雲を見送る秋簾  
宵闇の似合ふピアノの夜想曲  
ギネス認定美容師百歳の新秋

萩の花 山中みどり

うつとりと蟪蛄喰はれ恋終る  
空を切る蟪蛄の鎌恋敵  
したたかに繋ぐ命やこぼれ萩  
銅鑼打ちて訪なふを告ぐ萩の寺  
ままごとの盃に盛られしこぼれ萩

秋を待つ 柚木治子

白檀の残り香今し扇置く  
秘し事のつや二つ秋扇  
ふんはりと遺影が包む竜胆忌  
次の季へ廻り舞台の野分かな  
鶴を折るひと日の終り虫時雨

熟成 由良ゆら女

朝露に声呼び戻すなつとう屋  
言の葉の熟れははまだ星月夜  
中汲や昔日の恋育てつつ  
味噌蔵に住みて声よきちちる虫  
パン種を叩きねかせて月祀る

天の川界隈 網野月を

白鳥の翼の拡ぐ天の川  
須原屋の切絵図展げ天の川  
吐きとほす嘘が誠に天の川  
瓶底に円錐の見ゆ天の川  
握り拳を硬くした日日天の川

初 秋 石井喜恵

江戸むらさき 大橋廸代

化野や夕日重たき夏の果  
迂回路の太き矢印鬼やんま  
秋立つ日きれいに割れるチョコレート  
秋燕やころろと曳く旅靴  
荒磯にからむ藻屑や秋つばめ

富士の吐く一朵の雲に充つ秋意  
北斎の波より高し葛の風  
東西の雲せめぎあふ残暑かな  
朝顔や江戸むらさきは母の色  
姫垣に忘れエプロンちちろ鳴く

木 道 石山かつ子

こぼれ萩 大村節代

向かう気の娘が扇ぐ御輿かな  
秋うららつままでみたき体脂肪  
空の果て見たくて蜻蛉高く飛ぶ  
木道はからりと乾き大花野  
紋様は神の采配屁放虫

初秋やぼろり本音を洩らす友  
秋日濃し光背煌めく摩利支天  
方丈の茶室に茶掛こぼれ萩  
太極拳なべてなだらか大花野  
花野行く遙か彼方に大浅間



忘却とや 小倉倭子

天の川 菊池ひろこ

日参りの神社の砂利音色なき風  
リハビリの散歩を日課生身魂  
忘却や敬老の日のわが齢  
誘はれし旅を断り天の川  
宵闇の「ワインレッドの愛」聴くCD

生家なる土の堅さや天の川  
縁に佇つ祖母の簪天の川  
銀漢の下のだこかに散弾痕  
雲切れて褥とおもふ大花野  
身に入むや妣も拭きたる黒ピアノ

お鷹ポツポ 栢尾 さく子

人恋し 五明 昇

晴天を喜び合うて紅蜀葵  
たますだれと名のりてやさし秋の花  
爪切つてもらふ至福の日永かな  
立ち上る思ひ出数多りんどう忌  
初嵐お鷹ポツポの声混じる

漁火が繋ぐ海峡星月夜  
秋蝶や謂れ哀しき壇ノ浦  
帰燕また波間に白き巡視船  
秋草や栄枯久しき野面積  
人恋し秋の簾の内あかり

故郷とほし

境

延昭

初

秋

島津初花

枝豆にまたも本題切り出せず  
母の居ぬ故郷とほし蕎麦の花  
秋の夜のコクピットより町明り  
秋すだれ厨に煮付焦げてゐる  
宵闇のヘッドライトに見る未来

小荷物の一房重しマスカット  
お供への葡萄は粒の光り合ひ  
初秋やをさな腕に注射跡  
秋の蝶纏れし影を残しゆく  
音読のリズムよろしきちちる虫

百日紅

椎野美代子

秋

草

鈴木康世

遠く見て色の極まる百日紅  
百日紅旺ん紅唇褪せやすし  
老楽や日日躁躁の百日紅  
暑いねと問えば熱いね百日紅  
日盛りの百日紅の昏さかな

秋草の満つる通ひ路夫の声  
ひとり歩きの杖の後先草の花  
秋草に力受けゆく阜道  
狼煙台が要の公園秋の草  
秋草に坐し口吟を繰り返す

秋 意 田 寺 玲 子

石 榴 鳥 羽 和 風

魚板打つ音新涼の建仁寺  
洛中に源氏香聞く秋意かな  
送りませ少女の巻毛照り翳り  
ジャズ流る港神戸の秋の夜  
手のしみを気にしエチュード弾く秋思

産み月を過ぎて今日明日石榴の実  
口割れば余罪もぼろり石榴かな  
実石榴やルビーの光り覗かせて  
蛸壺に石榴食み出る浜の宿  
五箇山の戸板の端に石榴かな

秋 意 十 倉 和 子

手 永 野 史 代

真葛野や風渡るとき秋意濃し  
皇子の碑へ藤白坂の雲秋意  
夢二絵の女と秋意同じゆうす  
かげろふをとらへてよりの秋意かな  
師の旧居更地となりて秋の風

ぽつんと西瓜ぽつんと私留守番さみし  
兄の声われに加勢す西瓜割り  
手仕事の指軽やかに秋はじめ  
母の文読み終へ燕帰るかな  
白湯に手を温めてをりぬ白露かな

晩 秋 西山 貴美子

風知草外へ外へとそよぎけり  
括られていびつに笑ふ野菊かな  
鹿笛にアンナとなりて立ちつくす  
露草のひよろりと風の拍子抜け  
もう一度遠のいてみる 諸畑

コスモス野 波多野 寿子

リフト爽快揺れてひろがるコスモス野  
ほろほろと庭隅に消え秋の蝶  
日暮れてもあくまで白き蕎麦の花  
雲流れ麓にそよぐ花すすき  
秋ざくら妣の手箱に千代紙が

人の和 星野 和葉

路地奥に人の和今も秋なすび  
縁側の欲しリビングの月見酒  
それなりの膳を囲みて月の宿  
扇ぐでもなき手遊びの秋扇  
抜け道に繋がる井戸や白桔梗

詣でる 茂木 和子

秋の蝶佛足石に羽根ひろぐ  
飛びながら小草に群るる秋の蝶  
昼の退屈風吹きこぼす秋の蝶  
句碑の肩羽根たたみたる秋の蝶  
秩父路の秋七草を詣でけり

# 季音月

秋草

大場順子

迷ひなき押印の指涼新た  
 家中に秋草を活け野のごとし  
 束ぬれば沈金の艶秋の草  
 円墳より方墳へ継ぐ虫の声  
 牛王宝印受くる本宮秋の昼

豊の秋

池田雅夫

うつすらと風のかたち  
 壮絶な絵物語や菊人形  
 温め酒見知らぬ人と同席す  
 とんとんと進む縁談豊の秋  
 稲雀よその田へ早よ行くがよし

黒と白

正木萬蝶

銀浪や一つはウルトラマンの里  
 東に吉原西にはカスバ天の川  
 住職に恋の噂も秋の草  
 なぐさみに八千草もちて母の床  
 葡萄食み碁石の黒が勢ひづく

秋光

松井由紀子

秋光の街なれば杖曳くもよき  
 入相や鹿の目うすく光り初む  
 青みかかんみ寺に邪鬼の響め面  
 目鼻なき地蔵野に坐す秋時雨  
 隻眼となりてなほ澄む今日の月

蕎麦の花

高島寛治

一村は過疎化に耐へて蕎麦の花  
 湧き出づる雲の秩父嶺蕎麦の花  
 老いてなほ話弾むや今年酒  
 寝つかれぬ我が故郷の虫時雨  
 友見舞ふ木槿の花を目印に

相合傘 渡辺 舍人

秋時雨相合傘に男どもも  
漏刻のごとき滴滴秋の窗  
台風の眼中にゐてホームラン  
唾蟬をわれかと思ふ二度寝かな  
手花火の終ひの煙ゆふの路地

薔薇色の食前酒

梅澤 佐江

敬老の日の薔薇色の食前酒  
色鳥を遊ばせおはす天女像  
秋ともし青海波彫る沈金師  
吾の五感研ぎ澄ましゆく芋嵐  
宵闇の街にそれぞれ生活の灯

夕立雲 森川 義子

たちまちに山下りて来る夕立雲  
宵闇の其処だけ灯る鶏舎の灯  
鰯焼く煙昭和の夕のごと  
食べ頃の表示信じて買ふ白桃  
長き夜の二十四時間心電図

震災忌 井上 燈女

父母のこと遠のく月日防災日  
来し方の昭和の街や爽やかに  
次世代へ語り継ぐべし震災忌  
劫火二度あひし老女の震災忌  
母の物着こなす姉妹菊日和

良夜 松宮 保人

空の巢と糞を残して秋燕  
心地良き微睡みなりし秋簾  
別邸より吟詠流れくる良夜  
挽ぎ立ての押し競饅頭やマスカット  
台風の余波に構へし船出かな

馬頭観音 松本 光子

疎遠なり友思ひつつ菊贈  
男達の手際見事に走り蕎麦  
秩父路の短き旅の彼岸花  
利根晚秋少年石投げ波たたす  
馬頭観音火色に染まり曼珠沙華

花蕎麦

丸山 マスミ

間引菜に残る土の香朝厨  
特攻の遺書の滲みや秋の昼  
櫂の音川面を滑る秋の昼  
花蕎麦を左右に分けて札所寺  
秋の灯やルーペ片手に江戸古地図

芋嵐

山田 美佐尾

木犀の豊かな香り仁王像  
旅に出て二の膳にのる新豆腐  
還暦や赤の座布団望の月  
大の字に寝る帰省子や芋嵐  
六地藏手に手に玉を芋嵐

新松子

荒井 俱子

爽やかや腰で梶とる一輪車  
おたがひの惚けを笑うて衣被  
秋彼岸念仏婆がうはさは元  
新松子歳月を経し長屋門  
街道に往時のなごり新松子

大花野

井上 玲子

流れゆく雲招きたる大花野  
踏み入りて甘き風吹く大花野  
灯が洩れて夕づく秋簾  
灯が洩れて一日の暮色秋簾  
身に沁むや夫に石積む恐山

鼻の差

近藤 徹平

鼻の差の写真判定天高し  
荒浪に吹つ飛ぶ富嶽初嵐  
稚をあやす島の駐在いわし雲  
宵闇や昭和歌謡に酔ひ痴れる  
乙女の像に宵闇せまる湖畔かな

秋桜

大塚 茂子

水鏡触れてみたくて撓む萩  
十二時の母の黙禱震災忌  
台風を凌ぎ切つたるコスモス野  
かばんから子猫の貌やコスモス野  
産み終へて泣いて笑つて月祀る

口紅 福田千春

屋上に寄り添ふ影や星流る  
糜校に子ら肝だめし大銀河  
飴釉の益子の湯呑みけふ白露  
お薬手帳は最後のページ白露かな  
久々に妻は紅さし白露かな

菊日和 上戸千津子

賑やかな友と連れ立つ菊日和  
彩りの今朝は際立つ葉鶏頭  
老い老いて最前席へ敬老会  
コスモスを半眼で愛づ辻地藏  
来し方の手相は確と秋の水

夜更け 熊倉千重子

秋風を入れ高原のレストラン  
熱気球花野の空をふはふはり  
途切れとぎれの会話を繋ぐ秋扇  
秋高しサイクリングの連なりて  
身にぞ沁む軒の風鈴鳴る夜更け

目移り 町野広子

ガラポン一等両手で受くる大西瓜  
振舞ひの西瓜小さきを目で探す  
目移りも心変りも夏の果  
門口に母を待つ夕秋初め  
五時に鳴る閉門チャイム秋燕

猫じやらし 内田恵子

和三盆の菓子のやさしく涼新た  
衣被本音ぼろりとこぼれ落つ  
牧場へ続く抜け道猫じやらし  
巨樹の肌そつと触れれば秋の声  
白帝や死神きたる向かうから

爽やか 川崎道子

爽やかや木太刀を背負ふ御下げ髪  
小鳥来る掛声もるる無双窓  
小鳥来る聞き耳頭巾欲しくなり  
十六夜や学習塾の窓煌煌  
防人の歌碑を尋ねて秋意かな



気分上々

野口和子

赤とんぼ空き缶空き瓶回収日  
短冊の千切れ千切れの秋風鈴  
秋の蛇五十男の慌てぶり  
誉められて気分上々栗ご飯  
朝な夕な白菜苗床眺めっこ

札幌

松山清子

まつすぐな北大通り秋の風  
道幅の広き街なり秋高し  
秋の雨明治の校舎白く映ゆ  
秋晴やカメラの並ぶ時計台  
藍の濃きアイヌの衣装秋の旅

☆

☆

俳句四季新人賞  
受賞記念作品20句

犬星星人

俳句四季新人奨励賞  
受賞記念作品20句

内野義悠  
早田駒斗

新人賞最終候補者  
競詠5句

☐好評連載

成瀬政博

とりあえずの日々

筑紫磐井

俳壇観測

坂口昌弘

忘れ得ぬ俳人と秀句

青木亮人

句の手触り、俳人の響き

大西朋

俳句へまなざし

神作研一

てのひらの江戸

—— 古典籍を旅する

藤村公洋

俳句のつまみ

穂矢まりえ

諸家書架

二ノ宮一雄

一望百里

☐俳句と短歌の10作競詠  
こしのゆみこ  
阿木津英

☐今月の筆

今瀬一博

藤本はな

俳句四季  
Haiku Shiki

2023年12月号

11月20日発売  
定価1100円(税込)

<https://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

# 季音花

生きる 日高道を

追憶の「ゴンドラの歌」秋の夜  
日の本はをんなならでは夜の桃  
現世と来世の狭間 雁渡る  
空を見てそして地を見る豊の秋  
鮎錆びてこきりこ節の棹の音

自問 青木鶴城

止めどなき多忙の日日や赤蜻蛉  
週末の一番札所秋深む  
萩枝垂る金剛杖ときざはしに  
足を組み瞑目すれば法師蟬  
曼珠沙華人は自問を繰り返す

盆の窪 曲淵徹雄

初秋や白が命の波頭  
秋めくや一木の影磴を占む  
桐一葉一雨を待つ盆の窪  
潮の香につとひき返す赤蜻蛉  
小間物をひさぐ横町秋の風

父の形見 保坂翔太

衣魚ひとつ父の形見の日章旗  
朝焼の坂東太郎魚ジャンプ  
大海月宇宙遊泳さながらに  
ジェット機を造れぬ国や敗戦忌  
自在鉤に大き鉄瓶零余子飯

秋彼岸 河野はるみ

半衿の黄色のぞかせ秋袷  
四段目の小鉤残して秋袷  
僧院へ長き階段秋の昼  
彼岸花白くきりりと見送れり  
天の川祖父ちいぢもいるよ笑つて

薄 墨 檜 鼻 ことは

つまみ食ひ楽しむ母の十二月  
待春の母は畑におはしけり  
母の日や母の箆筒の母子手帳  
葛餅やひとつおくれと母の言ひ  
父の声母の声聞く蜩の夜

自 然 石 田 慶 子

カフカを語る君を隣に天の川  
天の川夫の自慢の望遠鏡  
白露指しおはじきと言ひ母弾く  
目を凝らす注意メールや台風来  
わが庭に小さき池あり無花果あり

雁 渡 し 野 田 静 香

候鳥や夕日を浴ぶる斜張橋  
木犀の小枝を卓に文を書く  
霧雨のビルに映りし影二つ  
落鮎や迷ふことなき母強し  
かけつこの順位は聞かず雁渡し

秋 の 雨 笹 本 啓 子

秋簾半分巻きて小商ひ  
掌で量る鰯や朝市女  
大漁や鰯積み上げ親子船  
図書館に古書の匂ひや秋の雨  
新松子今も残りし脇往還

葡 萄 棚 横 山 君 夫

阿波踊腰の印籠をどらせて  
終バスの扉開くたび虫時雨  
野分過ぐ一番星を置き去りに  
友見舞ふ帰りの道の法師蟬  
葡萄棚沈むばかりに房の数

桐 一 葉 染 谷 風 子

爽やかや浅草六区の啖呵売  
初更には閉まる玄関穴惑  
虫の音や机上のランプ暫し消し  
豊臣の五七の桐よ一葉落つ  
桐一葉踏んで低吟王維の詩

秋の水 渋谷 きいち

滑滝を滑る秋水音もなく  
笹舟で占ふ未来秋の水  
木犀のくねは直列花屋敷  
斜陽を浴ぶる網戸に眺く秋の蟬  
崖観音を遠巻にして曼珠沙華

秋草 石川 理恵

無造作に活け秋草の様になる  
名付け親は富太郎かも秋の草  
風よ吹けこぼれてこそ萩の花  
白桔梗ぼんと音して開きけり  
天仰ぎ一句待ちをる子規忌かな

白露 鈴木 玲子

西瓜食む人多ければなほ旨し  
艶なるや酒注ぐ所作も風の盆  
能楽堂に謡幽かに白露の夜  
ガラスペン使つてみたし白露の日  
木目込みの頬ふくよかに良夜かな

さるすべり 中野 彊

扇風機向き感じつつ読書かな  
花火大輪まだ余生あるわが鼓動  
曲がる角どこも扉よりさるすべり  
晩夏光海辺にホテル組み上がる  
秋祭太鼓近づく昼下がり

萩 原田 秀子

コスモスの街道抜けて佐久の鯉  
さやさやと風の抜け道秋桜  
鐘楼の階を彩ふるこぼれ萩  
偕老の緩り散歩や萩の花  
肅肅と烏鷺の争ひ萩の宿

林檎むく 宮崎 チアキ

林檎むく幽かな香り朝の膳  
木漏れ日を揺らす風音秋の昼  
松本城の高き天守や秋の水  
伸びやかに茜広がり秋の暮  
待宵や大樹の下に丸太椅子

稲刈り風景

田中章嘉

稲刈りや総出の姿夢の夢  
山間の稲架の屏風も南向き  
稲刈機刈れば藁屑吐くばかり  
珍しき蝗一匹逃げてゆき  
稲刈りて秩父連山日暮中

蕎麦の花

下川光子

蕎麦の花古道に今もしるべ石  
蕎麦咲いて巡礼道の風やさし  
名水の郷の新酒や草の青  
新酒酌む夫の遺影に会釈して  
献血のテント真つ新秋の雲

こきりこ節

松島寛久

団塊の男の手酌台風来  
木漏れ日に捨てた夢拾ふハンモック  
老僧の筆も枯れゆく桐一葉  
もう若くない娘のソナタ夕秋簾  
芒原こきりこ節が老い誘ふ

結城の里

野村美子

砧打つ結城の里の技守る  
秋日和赤銅色の車夫の脛  
宵闇に宿静まりて川の音  
秋簾昨夜の風で無惨なり  
西銀座秋一色の窓飾り

稲の花

後藤綾子

まほろばの大和路稲の花開く  
富士山麓裾広げゆく秋櫻  
風匂ふ見沼田圃の稲の花  
柿たわわ実る秩父の空青く  
秋灯や濠に写りしビルの窓

秋の雲

飛永鼓

新涼や誘ふ庭の音楽会  
いにしへの色を零して葛の花  
秋の雲こんなところに佐渡ヶ島  
恐竜もひよつこり現はる秋の雲  
胸襟を開き見据うる秋の雲

秋の味覚

瀬戸 雄二郎

ニユースだけ姿は見えず初秋刀魚  
これこれと額叩いて新酒酌む  
新蕎麦を食べし自慢や嫌み無し  
新米新蕎麦新しくならない私  
魚屋の一等席に新秋刀魚

ブルームーン

葛城 千世子

丁寧にだし巻き卵今朝の秋  
高齢者講習終へて秋夕焼  
観月や色無地を着て供花用意  
深呼吸してブルームーンを仰ぐ  
秋の宵四つんばひしてやつと立つ

秋暑し

高橋 満耶子

みたらしに浮かぶ一葉秋意かな  
蛸や九十二歳の案内僧  
宿坊の夜通し激し秋の雷  
秋暑し八十路の坂に差し掛かる  
秋暑し「地球の沸騰」おさまらぬ

# 俳句

## 12月号 予告

11月25日発売

予価1,100円(本体1,000円)®

特別作品 高橋陸郎・三村純也・井上弘美

# 写生

## 言葉を見出す面白さ

### 大 特 集

▽総論 観察と写生／なぜ写生が大事なのか

〔論考〕 写生句の変遷 明治から令和まで

観察のコツ、言葉の探し方

写生における発見

〔鑑賞〕 写生の名句50選

鑑賞特集

## 夜の名句

六か月連続企画!

# 全国結社マップ

vol. 3 南関東

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売! 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

# 『水明誌』

を繙く

(水明九月号)

中内亮玄

(「月鳴」主宰)

甲羅干す亀のまばたき半夏生 石井喜恵

二十四節季のひとつ半夏生は、梅雨明けの目安となる時期です。今年は7月2日からの5日間でした。

この日は夏バテ防止のために、当地福井県では丸焼きの鯖を食べます。特に、江戸時代の大野市から広がった風習です。

また、田植えて疲れた体を休めるためか、昔から「半夏生の時期には働いてはいけない」とされてきた地域もあるのだそうです。

そんな半夏生に、亀が甲羅干しをしています。暑い中、手も足も微動だにしません。しかし、よくよく眺めていると眠たげにまばたきをしているのが見えた、という何とものんびりした様子。それを眺めている作者自身の、のんびりとした心のありようも見てとれるようです。

カサカサに乾いていく亀の甲羅、それに対して半夏生の湿気を帯びた暑さ、正反対の感覚ながら乾燥も湿気も読者は強く実感します。そして、ゆつくりと、物憂げに閉じては開く亀のまばたき、そのじれったくなるような時間の経過。

ただの写生句でありながら、景色に説得力があるのです。

日盛やパレードを待つ人の黙

日高道を

9月10日の日曜日のこと、こちら福井県の駅前では、大通りを封鎖して自衛隊のパレードが行われました。空にはジェット機も飛ぶという、派手なイベントです。

9月とはいうものの大変な暑さで、「日盛り」は夏の季節ではありませんが、そんな表現がぴったりの暑い日でした。その実際の景色と重ねながら、掲句を味わいました。

歩道には親子連れや自衛隊ファンの方々、それぞれ楽しそうに騒いでいますが、あまりの日差しに人々は日傘を差し、帽子をかぶり、団扇で顔を隠しています。そして、この強烈な日差しは、逆に隠された顔を真つ黒な影にしています。

真つ白に照り輝くコンクリートの歩道やビルと、パレードを待つ黒いのっぺらぼうの人々、このモノクロームの世界からは、まるで声も失われてしまったようです。

もちろん、素直に「パレードを待つ人々が期待に静まり返る」という状況にも読めるのですが、私は、本当に皆が口を開かず沈黙しているわけではなく、騒がしくても作者の耳には届いてこない、そんな日盛りの午後を思い浮かべました。

# 現代俳句鑑賞

網野月を

裏窓にアロエのたうつ梅雨入りかな

小川 軽舟

〔俳句〕9月号・胸座より

アロエは「医者いらず」とも言って、下剤や健胃薬に用いられるが、一般的には観賞用として植えられたり、食用としても用いられる。あの奇態は龍舌蘭に酷似しているが、科属は異なる。このアロエは観賞用であろうか。「のたうつ」の動詞一語によるアロエの形容が見事である。他に「月出でぬ山の胸座押し分けて」がある。

みんみんが鳴きだせば我が誕生日

本井 英

〔俳句〕9月号・Z海岸より

ミンミンゼミは盛夏を代表する蝉であり、翅までいれると六センチメートル余にもなる大型のそれである。体には黒地に緑色の斑紋があり、翅は透明で黄緑色の翅脈が通っている。雄は精いっぱい「みんみん」と鳴くのであって、作者はそうした盛夏の生きざまを自らに模しているのかも知れない。そこまで深読みしなくとも実に分かり易い句なのである。他に「水着きて四頭身や可愛らし」がある。

宵闇の文机に置く文の束

鈴鹿 呂仁

〔俳句〕9月号・月より

句意に納得させられてしまうのである。この「文の束」は往信の文であろうか、返信されて来た文であろうか。旧暦七月の文月は、文ひろげ月、含月（ふふみつき）、親月（ふづき）との関係性を云々されるが、その一ヶ月後の「宵闇」である。筆者は勝手に返信されて来た「文の束」であろうと推測した。上五の「……の」は句の意味からして、半切れくらの間を持たせているようである。他に「三日月や宛名御許の熟れ文字」がある。

銀漢や熱帯びてくる四楽章

桑田 真琴

〔俳句界〕9月号・新作巻頭より

座五の「四楽章」は第四楽章のことであろう。クライマックスを彩る、文字通りの終楽章なのである。マチネーの催しもないわけではないのだが、いつのころからか、コンサートやリサイタルはソワレが主流のようである。そこで「銀漢」なのである。コンサートの興奮を視覚的にも心に刻み付ける



「銀漢」である。他に「身に入みてチエロ一挺の深き森」「降り立てば古都秋爽のフェルマータ」がある。

月光に射られし眼もて眠る 今井肖子

〔俳句界〕9月号・月天心より

「射られ」て、臉上に月影が焼き付いているということである。眼を瞑り、その月影を思い浮かべながら眠りについているということである。「もて」の概念的把握が、「月光」の写真を文学にしている。他に「月天心夜は沈んでゆきにけり」がある。

裂膾母の拇指おゆびのたのしげに 中西夕紀

〔俳句界〕9月号・秋の食べ物を詠むより

掲句にはエッセイが付されている。「裂膾」というのは刃物を使わずに指で裂いて作る鰯の膾のこと。小鰯は柔らかいので指で頭を取り、腸を取り除き、綺麗に洗って塩を振り酢でしめる。」とある。お母様の手料理で、鰻料理屋を経営されていたご祖父の直伝であったらしい。「拇指（おゆび）」の実に見事な様を「たのしげに」と擬人法にまとめている。他に「新豆腐その夜の月の隈なかり」がある。

柿の色とにかく生きなさいの色 宮崎斗士

〔俳句界〕9月号・秋の食べ物を詠むより

作者の主観が横溢した句意である。作者の心情が表現されるものは所謂、抒情詩なのであるが、主観と心情は異なる様である。掲句を見れば一目瞭然であろう。事柄を詠みながら、その事柄の根源は主観にあって、一歩も譲ろうとしない頑固なまでの言い回しに、筆者は惹き付けられてしまうのである。

他に「チャップリンのあの歩き方柿の味」がある。

ひさかたの夢を醒め倦む緑雨かな 岡田一実

〔俳句四季〕9月号・塔の影より

元来「ひさかたの」は語義においても係り方においても未詳であるが、明確に「緑雨」に係っている。「緑雨」に対して夢を醒ましたとして恨みに思う気持ちなのであろう。筆者は、「倦む」を「緑雨」に掛けて解したのであるが、もしかしたら「夢」に掛けても解せるかもしれない。他に「十葉や庭ふところを塔の影」がある。

帳尻は合はぬままなり新酒かな 星野和葉

〔俳句四季〕9月号・粋な送り主より

「帳尻」はむろん金銭面のことであろうけれども、人生の時間配分とも深読みが出来るところである。ただ作者は、座五に「新酒」の季語を配することで「合はぬ」ことの是非を問わない態度を示しているのである。いや「合はぬ」ことが寧ろ自然の理にかなっているとでも言いたげである。他に「贈られし新米粋な送り主」がある。

使用済の肉体白し麦の秋 日高道を

〔俳句四季〕9月号・人には人のより

爪の先ほどの部位のことならば諧謔に徹しているということも出来るのだが、どうやら「肉体」は全肉体を想定している実内容であると考えられる。「白し」は視覚的把握の実景であることに加えて、「澄んでいる」とも「無になつた」とも様々な意味合いを包含しているように筆者には読める。座五の季語「麦の秋」の配合が見事である。他に「八月の前頭葉は言葉の海」がある。

# 俳句に支えられて



## 島津初花

私が本格的に俳句を作り始めたのは「乙花会」誕生の日からです。昭和四十六年師走のこと、故城子先生から小原区の中で俳句の会を作ろうと相談があり、募集したところ年齢の差も広く男女合わせて二十五人集まり、その夜に「乙花会」と決まり毎月五日を例会日と決め今日まで続いています。

### 雑の客雑より澄まし座りけり

三人の娘の育児中で三十三歳でした。それから三年後、拙い足で合同句集「乙花」を発刊することになり、序文を星野明世先生が書いて下さいました。若狭水明会の数名も加わって頂きました。若狭水明会は、昭和二十二年戦時中に大鳥羽へ疎開されていた沢本知水先生と山本嵯迷先生から水明俳句を学ばれた城子先生、数名の仲間を集められ両先生がお帰りになられた後も若狭水明会として発展して行きました。

昭和五十六年城子先生に手を引かれ、全国水明大会に出席した時のことです。若狭から男女十名が水明旗を揚げて乗車した日をはつきりと覚えていきます。

### 水仙の袴整ふ指輪かな

紗一主宰と明世先生が若狭へ来られた時の句会で私の句が特選になったこの一句は、その後私の俳句づくりの礎となりました。

昭和五十七年度の新珠賞に選ばれ、この頃は水明全国大会は地方で開催され、この年は若狭の旧上中町住民センターが会場で浦和から星野主宰一行が来られ、授賞式でお祝いと花束を頂きました。

天徳寺瓜割公園には、かな女句碑、秋子句碑、星野紗一、明世夫婦句碑が建立され、除幕式に全国水明会の皆様が参加

され、若狭とのご縁はさらに深まりました。

平成十一年、乙花会発足してから二十五年目に第二集「合歓の花」をさらに三十二年目に第三集「夫婦岩」を発売しました。

### 花合歓にうれしき句集の重さかな

平成二十四年十月に米寿を迎えられて間もなく城子先生とのお別れする日が来たのです。

長年に渡り先生の功績が実り、平成二十七年四月に水明会、鳥羽谷有志の皆様のお陰で鳥羽公園に句碑が建てられました。

三月に思い掛けない「かな女賞です」と主宰からの電話を頂きました。このことを真つ先に伝えたくて公園の碑の前に行きました。句碑の隣に植えた記念樹の白梅は今年も咲いてくれました。

この度はかな女賞を頂き本当にありがとうございました。

主宰、月を先生、編集長、そして句友の皆様、これからもご指導をよろしくお願い致します。

毎月25日発売 定価1000円(税込)	月刊	<b>俳句界</b>	2023年	12	月号
<b>特集</b> 俳句が他分野に及ぼす、 さまざまな可能性を探る	○医療・福祉 品川純胡 五島高資 堀田季何	○教育 加藤かな文 塩見恵介	○絵本 本井英 奥田好子	○芸術 馬場駿吉	<b>「俳句の「可能性」</b>
<b>対談</b> 佐高信の甘口で「コンニチハ！」 <b>星野博美</b> (写真家・作家)	<b>私の二冊</b> <b>守屋明俊</b>	*セレクション結社「雛」福神規子	<b>鑑賞</b> 柏原眠雨 中川雅雪 谷口摩耶	<b>注目の句集</b> 江見悦子『砂時計』	<b>特別作品21句</b> 大輪靖宏「輪」
<b>「俳句界」投稿欄</b> 一流選者14名! 日本一充実の投句欄	<b>特集</b> 産土を詠む 五十嵐秀彦 浅川芳直 角谷昌子 柴田多鶴子 井上康明 井上弘美 亀井雉子男 岩岡中正 マブソン青眼	クラシク 俳句界NOW 小川晴子			
※一部変更の可能性あります。					
株式会社 文學の森   東京都新宿区高田馬場2-1-2 田島ビル8F   求めは●●〒169-0075   TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com					

# 自選五十句

島津初花

水仙の袴整ふ指輪かな  
湿りたる国旗を仕舞ふ二日かな  
音立てて砥石に沁みる寒の水  
泥の手を宝と思ふ春の水  
白梅の枝に止まりし一番星  
苺熟る矮鶏の番の首低し  
蘇枋咲き背後のものは暈したり  
藤房のほかは濡らさぬ夜の雨  
舟どなりをさな鶴匠に手を振れば  
威勢よく並んで焼ける秋の鯖  
赤蜻蛉戯る里に境界なく

---

化粧して枯野を塞ぐ農具市  
頬被り遮二無二生きて汗が華  
桃の花根元に埋める鶏の肝  
かたばん屋はカンナの花が目印よ  
新涼や塩の袋の封を切る  
貴婦人が焼き芋を買ふ嵐山  
卵酒壁の標語を読みながら  
人慣れの麒麟にかかると大西日  
百姓の土洗ふ日の野分かな  
花束の重みずしりと初嵐  
木犀の匂ふ匂集の色なりし  
ヘルシーの本などもあり春炬燵  
芒野は思はぬ風の湧くところ  
レモンスカッシュ泡のやうなる雪女

---

仕来りの薄らひでゆき芹を摘む  
先頭を行くべき器量年男  
如月に一名消えし住所録  
寂しさを丸めてしまふ千枚漬  
名月や猫がゆつくり道歩く  
バス止めて一盛を買ふ夏みかん  
大寒や紅引くことも怠らず  
八重桜師の碑の座る佳き日かな  
白梅や真正直を貫きて  
寄せ鍋の蓋をどり出し客を待つ  
恋星のすぐに見つかる天の川  
ペランダに産衣の揺れる秋桜  
花種を軽く舞はせて蒔きにけり  
雁帰る屋根屋は軽く声飛ばし

---

冬うらら伊勢の神楽の村まはり  
置き忘る帽子は霧に沈みをり  
波音は姫のことづて年忘れ  
千年の鵜飼語りて秋暑し  
農魂の男黙して冬田鋤く  
松過ぎて少し傾く花の芯  
濡れ髪を束ねる如く芹洗ふ  
師の声の風に吹きたる桔梗の紺  
秋めくや指間を抜ける豆腐水  
榛の木の貧しき田道虎落笛  
初空へ傘寿の一步踏み出せり

# 城子の一番弟子

## 鳥羽和風

島津初花さん 貴女は今の若狭水明会にあって一番早くから水明との繋がりがあり鳥津城子先生の一弟子として小原乙花会の中核となつて活躍され城子先生亡き後も乙花会は元より鳥羽谷俳句会の副会長を勤め現在に到つておられます。古いアルバムの中に名水公園に有る長谷川秋子句碑完成の時の記念写真に若狭水明の先人達と共に初花さんの、若々しい容姿が残つておりちなみに昭和四十九年の撮影であります。又 この度かな女賞に付きましては、若狭水明の中では城子先生に次ぐ二人目のかな女賞の受賞であり誠にめでたい限りであります。これから先何時までもお元気で若狭水明の先導役としてさらなるご活躍を期待して止まない次第であります。曾孫さん達と戯れる初花さんの姿は日本一幸せな俳人初花さんであり、世界一幸福な島津家のお婆ちゃんなのです。

泥の手を宝と思ふ春の水

百姓の土洗ふ日の野分かな  
頬被り遮二無二生きて汗が華  
化粧して枯野を塞ぐ農具市  
農魂の男黙して冬田鋤く

農一筋の逞しい初花さんの姿が飛び込んで来た。農に生きる者にとつて土との繋を巧みに詠んでいる。泥の手を宝と詠む初花さんの想い、何人にもかえ難い生活を詠んでいる。

農業は自然が相手、台風や長雨、又今年のように猛烈な暑さ。これらによつて食品の相場まで変えてしまう。又農機具も時代を追つて新しい機械も出て来る。華の汗は新しい機械の購入費に回るのかも知れぬ。最近の農業は随分変わりつつある。請負耕作の進出である。田んぼに関してはすべて人任せで、水当てもパイプラインで昔とは楽になっている。農一筋の初花さんに見ればいささか頼り無いかも知れない。でも大丈夫、畑作が貴方を離さないでしょう。今までどうり自家農園で、頑張つて下さい。そして立派な野菜を朝市へ出して下さい。そんな初花さんが鳥羽谷の宝です。

威勢よく並んで焼ける秋の鯖  
初空へ傘寿の一步踏み出せり  
先頭を行くべき器量年男  
水仙の袴整ふ指輪かな  
ペランダに産衣の揺れる秋桜



若狭はリアス式の複雑な海岸線で生きのよい鯖が豊富に捕れ、浜焼き鯖として全国に知れ渡っている。浜焼き鯖は姿焼きで胴体を反らして頭と尾を上げて勢いよく焼き上げる為、祝儀時の肴として珍重されている。村祭や厄年祝い又村の神事など焼き鯖を大皿に丸ごと一尾を乗せて祝い肴として出す。それぞれ家庭における祝いの席にも摩り生姜を添えて食卓に出て来る。又福井県の奥越地方では夏至から数えて十一日目の半夏生に焼き鯖を食べる風習が残っており暑い夏を乗り切る為に夏バテ防止のスタミナ食として各家庭においても多く食されている。昔から「京は遠でも十八里」と言われ塩のまわりも京都へ着く頃ちようど良い塩味で若狭の鯖は極上品として喜ばれたと言われている。

千年の鵜飼語りて秋暑し  
舟どなりをさな鵜匠に手を振れば  
貴婦人が焼き芋を買ふ嵐山  
バス止めて一盛を買ふ夏みかん

俳句を始めたおかげで随分あちこちへ吟行の旅に出掛けたものである。地元の神社仏閣は元より、長良川の鵜飼、古都京都の四季を見る旅、越中五箇山の合掌造り、琵琶湖の浮御堂、奥能登の旅、富山の秘境、上げれば切がない。

吟行は作句が元よりであるが美しい流れるような風景と神社や仏閣の歴史に触れながら俳句手帳に写して行く、又会員

との親睦をはかるのも楽しみのひとつで特に夜の宴会は地酒や地元の名物料理に舌鼓、得意の歌なども出てそのムードは最高潮、正に鳥羽谷俳句会ここにあり、である。

長良川の鵜飼吟行では鵜匠の巧みな綱さばきに見入るばかり、舟で食べる鮎の塩焼きは鵜が取って来た物である。鵜匠も代代引き継ぐと言う歴史と伝伝がある。芭蕉の句に「おもしろうてやがて悲しき鵜舟かな」と言う句がある。芭蕉の弟子達はこの句を素晴らしいと誉めあつたと聞く。見事であり納得の行く俳句である。

芒野は思はぬ風の湧くところ

思はぬ風とは、ご主人の癌告知であった。思いもしなかった事が現実の事としてと到来したのである。しばらくは啞然と立ち尽す彼女、頭の中は真っ白に。さあこれからどうしよう、ご主人にどう話しをすれば好いのか自分との葛藤が始まる。農業一筋に頑張つて来たご夫婦である。何とか病気を克服し又二人でこの田畑に立ちたい。そんな思いが先を行くのである。明日はご主人にどう話そうか、難しい局面を迎える事になりそうである。とにかく本人を安心させる事が大切であるかも知れぬ。昔から嘘も方便と言う言葉がある「ゆつくり休んだら治るって」彼女は微笑みながら言ったのかも知れぬ。芒野の風は今日も治まりそうもなく吹き荒れている。

# 乙女のひとみ

## 檜鼻ことは

初空へ傘寿の一步踏み出せり

初花さんから句集「はつはな」をいただいたのは、令和二年四月のこと。

傘寿の節目に編纂され、薄桃色の表紙は如何にも初花さんらしくとも品のある装丁。句の他にエッセイや鳥羽谷に語り継がれてきた唄や言い伝え、初花さんの想い出が記されています。中表紙に初花さんが描かれた花の絵がいくつか挿入され、初花さんの思いがつまったとても素敵な句集に仕上がっています。

句集を上梓されたこの年の初め、整形外科の手術を受けられ、約二か月のリハビリテーションの後、目出度く退院。俳人として、さらなる活躍の第一歩を踏み出す句集でもあったように思います。

初花さんが俳句を本格的に始められたのは昭和五十六年の秋。島津城子先生の呼びかけで句会「乙花会」を結成。以来、毎月五日に「乙花会」の句会を今日まで続け、若狭水明、乙花会、鳥羽谷俳句会のリーダーとして活躍してこられました。

八重桜師の碑の座る佳き日かな  
師の声の風に吹きたる桔梗の紺

今は無き島津城子先生の遺志を引継ぎ、作句活動が続けながら、地元では乙花会、鳥羽谷俳句会、俳誌「鳥羽谷」の重鎮として、後輩の指導にあたっておられる初花さんは、気さくで親切なお人柄。どなたにも優しく接しられ、毎月の句会が楽しい句会となるのも初花さんが居てくださったればこそと感謝しています。

鳥羽谷俳句会は、毎年、鳥羽公園、若狭名水公園の句碑の清掃活動をするともに、「先人を偲ぶ句会」をおこなっています。城子先生への思いが溢れ出るような句は、城子先生と共に歩まれた初花さんなればこそその句。読ませていただくたびに、染み入るように、静かな感動を覚えます。

泥の手を宝と思ふ春の水  
農魂の男黙して冬田鋤く  
頬被り遮二無二生きて汗が華

百姓の土洗ふ日の野分かな

句集「はつはな」には、初花さんが嫁がれた当時の想い出も記されています。少し紹介させていただきますと、「結婚式のスタートが、農業と乳牛一頭。その後十五年の間に搾乳牛十一頭に増やし、家族も、義母の助けで子供三人を育てたが、時代の流れで、終止符を打ち、主人は建設会社に入った。……中略……子供たちも成長し、自分の時間を見つめる時を得て、俳句や吟舞に出会い、よき師と仲間恵まれ、今日までこれた」と書かれています。

ご主人と過ごされた日々は、ご苦労もあつたと思いますが、楽しくやりがいのあつた幸せな日々であつたのであろうと推察いたします。

レモンスカッシュ泡のやうなる雪女

かたばん屋はカンナの花が目印よ

恋星のすぐに見つかる天の川

昨年の七月、水明全国大会に初花さん、和風さん、鼓さんと四人で参加させていただきました。せつかくの機会なので、軽井沢に寄って帰ろうということになりました。

木立に囲まれベールのように美しい白糸の滝。地元の人からは「お水端」と呼ばれている雲場池。内村鑑三記念堂。石の教会は、足を踏み入れた瞬間、息をのむほどに凜とした緊張感が漂っていました。

さて、軽井沢での昼食は「万平ホテル」。令和五年一月から、改修工事に入るということで、改修工事前の万平ホテルを訪れることが出来たのは幸いでした。

軽井沢の四人旅。まるで乙女のように嬉々とした表情で旅を楽しんでいらつしやる初花さんの姿が忘れられません。

初花さんは、時として、瑞々しい句を詠まれます。優しくウィットに富んだ初花さんの一面を見る思いです。

威勢よく並んで焼ける秋の鯖

貴婦人が焼き芋を買ふ嵐山

初花さんの食べ物詠んだ句も好きです。食べ物を題材にした句は美味しそうに詠むに限りませんが、なんとエスプリの効いた句であることでしょう。

藤房のほかは濡らさぬ夜の雨

芒野は思はぬ風の湧くところ

冬うらら伊勢の神楽の村まはり

名月や猫がゆつくり道歩く

情緒豊かに余韻を残す句も多く詠まれ、映像と心象風景の美しさはいつまでも心に残ります。

この度は、かな女賞の受賞、誠におめでとうございました。これからも健康に留意され、乙花会、鳥羽谷俳句会のリーダーとして活躍されますよう祈念いたします。

# 島津初花の一句



石井喜恵

泥の手を宝と思ふ春の水

コロナ禍もあり実に六年振りという若狭訪問。五月二十九日から二泊三日の日程で句碑めぐり旅行が敢行された。鳥羽公園、瓜割公園にある先師の句碑七基を懇切に案内して頂いた。その際に初花さんにお目に掛り、更に六月の全国大会でも親しくお話しすることができました。何と、句歴五十有余年という大先輩、若狭水明の先駆者である事を知りました。此の度のかな女賞受賞、永年の研鑽と努力の賜物、誠におめでとうございます。

掲句からは農業に従事している人の凛とした矜持を思います。代々守り抜いてきた田畑の収穫の喜びの時こそ、この泥にまみれた手が愛おしくも誇らしいのだ。時は春、明るい日差しにすべての物が勢いづくこれからが本番だ。精を出して頑張らなくては、と初花さんの健やかな輝く笑顔が目には浮かびます。

「頬被り遮二無二生きて汗が華」

素晴らしいです。ますますのご健吟を……。

石山かつ子

赤蜻蛉戯る里に境界なく

山あり海あり風光明媚な自然に恵まれた若狭にお住まいの初花さんの句は、今回の自選五十句も季語の宝庫のような句です。

平地の池や沼から親になった赤とんぼは、真夏の暑い間は一匹二匹と山地へ移動して、そこで成長すると秋口になって集団で里へ戻ってくるので急に赤とんぼが出現したような気がします。稲刈りをしている空を赤とんぼが我が物のように自由に飛び回っています。そこに生きる人々の生活をあたたかな眼差しで詠んでいます。

北原白秋の「夕やけ小やけの赤とんぼ」……と口ずさんだ童謡をなつかしく思い出しました。

この度はおめでとうございます。これから初花さんのありのままの句を楽しみにしています。

## 内田恵子

### 泥の手を宝と思ふ春の水

遅しく働く泥まみれの手は、誰にとつても誇りに思う大切な宝物なのだ。その手に地球からの素晴らしい贈物の春の水はやわらかく豊かである。初花さんの大地に根ざした柔らかな生き方が見えてきて、みんな頑張れと励ましてくれる一句である。

うろ覚えであるが若い時に読んだ本の一節を思い出す。「考える前にまず行動せよ。太陽も行動せずに輝かなければ地球はどうなるのか」生きるとは泥の手になることから始まるのだ。

初花さんとの出会いは約三十年前珊瑚の会の吟行会ではじめて若狭を訪れた時であった。若狭は水明のふるさと、日本のふるさと、私自身のふるさとのように思った。初花さんと会う機会はそんなに多くはないが、深い繋がりを感じている。

かな女賞おめでとうございます。

## 大塚茂子

### 泥の手を宝と思ふ春の水

尊敬の眼差で、初花様の五十句読ませて頂きました。二度若狭を訪れた私は、若狭の風景と思い出を重ねて、一句一句の色を俳句に感じました。そして悩んだ末掲句にしました。小さな身体にある逞しさ、土と汗との匂い、

その中に優しい心が一杯詠み込まれています。厳しい若狭の冬が終り、日一日と暖かくなつたある日、畑の仕事を終えて、泥の手を洗いながら、長年良く働いてくれた手を、宝物と思つた心からの俳句です。季語の春の水がすべての疲れを流してくれました。他に最近詠まれた御句「初空へ傘寿の一步踏み出せり」があります。長年にわたり若狭水明の為に、句碑の清掃やその他、御尽力なさつて来られた事を知り、感謝の気持ちでいっぱいです。

初花様「かな女賞」受賞おめでとうございます。ます。

## 大村節代

### 八重桜師の碑の座る佳き日かな

初花さんは、故島津城子先生に師事され、休む事なくずっと俳句を続けられて、今年で五十年になられるという。城子先生は身罷られても掲句中七「師の碑の座る」のように、初花さんの心中深く生き続けておられるのだろう。

城子先生は「句碑はいらない。死後もいらない。」とおっしゃつておられたとか。それを初花さんはじめ、若狭の方々のご尽力と水明本部の協力で、ご遺族が承諾して下さつて、句碑建立にこぎついたらと伺つた。

掲句は、その城子先生の句碑除幕の日の喜びの句であり、下五「佳き日かな」に初花さんの心の内が伝わる。

今回のかな女賞受賞の喜びを、初花さんは早速、城子先生へ、句碑へ報告された事と思う。おめでとうございます。

うめのはな吾生涯の友なれや 城子句碑

## 威勢よく並んで焼ける秋の鯖

若狭名物の「浜焼き鯖」は家族に好評で、若狭を訪れる度に欠かさず家苞にしている。

浜焼き鯖は脂の乗った大鯖を塩やたれを付けずに丸ごと焼き上げた剛毅な一品。電子レンジで温め直し、生薑醤油で食べるのが一般的だが、極厚の身をほくほくして様々な料理にも応用できる。

若狭は天皇の食材を収める「御食国」として栄え、日本有数の良好な漁場・若狭湾で水揚げされた新鮮な海の幸を、京の都へ送る起点であった。京へと続く古くからの街道は「鯖街道」と呼ばれ、鯖を代表とする海産物は若狭から一昼夜をかけて都へと運ばれた。しかし鯖は足が早く、腐りやすいことから、鯖の風味を落とさずに日持ちさせるために考案されたのが小浜を代表する「浜焼き鯖」と言われる。

掲句は丸々と太った旬の秋鯖が、太めの串を打たれて豪快に焼き上げられるさまを活写し、若狭ファンの食欲をそそる一句である。

## 榛の木の貧しき田道虎落笛

昭和三十年代の鳥羽谷の田園風景がこの句によって思い出された。

榛の木は、鳥羽谷の田の道辺に、稲架を建てる時の常建つとして植えられた。大型機械の導入に伴い土地改良が始まると同時に榛の木は切られることになった。

現在、我が町へ都会から農業を目指す若者が、稲架干しにこだわる米作りで、唯一残っている四本の榛の木に稲を掛けている懐かしい風景を見せてくれる。

この榛の木といえば、俳誌「鳥羽谷」の表紙に現在二百号にも繋がっている。

創刊された昭和二十四年、知水、嵯迷先生の指導で始まった時、かな女先生が鳥羽谷の田園風景を見られての印象を書かれた自筆である。晩秋の野辺に立つ榛の木を見ると、子供の頃に遊んだ野辺の風景や父や母の仕事振りを思い出して懐かしく心動かされたこの一句を選びました。

## 名月や猫がゆつくり道歩く

月と猫の取り合わせ面白いですね。思わず笑ってしまいました。

何と風流な猫でしょうか。車のあまり通らない道を満月に向かってゆつくり歩いているのでしょうか。迷わず家に帰り着いたでしょうか。家では主が縁側に芒と七草を活け、だんごと柿、芋などを供えていました。ここでは猫は当然のようにちよこんと座って名月を見ているのかも……。「名月と猫」なんてタイトルの付いた写真でもありそうな。

誰でも満月を見たら満ち足りた気持になります。筆者も大きな満月を真前に見ながらの帰路、途中で見えなくなる時は、逆の方に曲つてもう一度満月を堪能してから帰宅した事もありました。満月を背にしてこちらに向つて来る人には「満月よ、見てー」と声を掛けたくなります。実際小学生に声を掛けた事もあります。

「名月や窓辺に明世を立たせし」 和葉  
こんな名月の晩もありました。

## 町野広子

### 威勢よく並んで焼ける秋の鯖

先ずは「かな女賞」受賞おめでとうござい  
ます。古里若狭の大先輩。何時も明るく、優  
しく、決して驕る事なく。同じ若狭人として  
心の拠であり、自慢の方です。

さて、一句鑑賞として迷わず掲句を選びま  
した。嘗て若狭から京へと、鯖を運んだ「鯖  
街道」があり、鯖は庶民の味方であった。そ  
の歴史は脈々として続き、鯖の一本焼きは今、  
若狭に無くてはならない物となっている。秋  
鯖となれば尚更。脂が乗った大きな鯖の口か  
ら尾へと太い串が打たれ、丸ごと焼かれる。

「威勢よく」の導入に勢いが飛び込んで来  
る。焼いている人とも思えるも、中七に掛り  
鯖の事と知る。まるで、自らの意志で火の上  
に並んだような言い回しが面白い。これぞソ  
ウルフード。焼きたてを生姜醤油で食す。酒  
もごはんも進む。県北部の大野市では、半夏  
生の日に、一人一本目安に購入されるとか。

その日、街は香ばしい煙に覆われる。

## 森本早苗

### 威勢よく並んで焼ける秋の鯖

空いっぱいのはつらつ、潮風の心地よい浜で良  
く肥えて脂の乗った鯖が、ジュンジュンと音  
をたてて焼き上って行く。

「さあ 今日も旨い焼き鯖寿司を作るぞ」  
と焼き手の氣勢さえ感じられる。明るく気持  
の良い句である。

焼き鯖寿司の発祥の地は福井県で、二千年  
五月の「三国祭」で披露されたのが始まりと  
か。

又、鯖街道を越え、丹波地方や京都方面に  
出た鯖は、老舗の高級食材になっている。

鯖は家庭でも、煮たり焼いたり酢メにと料  
理の幅が広く栄養価も高い。

その上青魚の持つDHAやEPAの含有量  
が高く血液の流れを良くする作用をして私達  
の身体を守ってくれる身近でとても有難い魚  
である。

漁獲量減少が気になる昨今である。

## 松宮保人

### 藤房のほかは濡さぬ夜の雨

藤の花と言えば、公園や観光地等で淡紫色  
の花房を付けた見事なまでの藤棚を想像する。  
だが、この句の中に出てくる藤房は作者にと  
つて、そのような華やかな情景を詠んだので  
はない。藤房そのものが自分にとって、毎日  
目にはしている我が家の前栽の景色を見ての一  
句ではなからうかと推測する。昨夜は少々雨  
が降ったのであろうか。そんな感じのする静  
かな朝である。藤棚に垂れ下がる藤房は朝日  
を受けて、その水滴が神しく光を放つてい  
るではないか。藤棚の下を見れば、昨日とは  
ほとんど変化はなく雨で湿った気配はない。  
藤房のみが際立ち浮き立って見えるのである。  
自分は暫くその情景に魅了されていた。  
藤の花は白色もあるようだが、やはり紫は  
高貴であり気高い花として、平安時代から親  
しまれているのである。

新季音同人

## わたしの近詠二句

渋谷きいち

鈴木玲子

染谷風子

私は山歩きが大好きです。今でも仲間と楽しんでいます。何が楽しいかって？ 打上げの乾杯ビール。これがあるので止められません。

### 雨粒を小花に溜めて赤まんま

出掛けた山で急な雨、急ぎ避難小屋へ雨を遣り過ごし外へ出ると雨雲は消え青空が天高く広がっています。さあ下山を急ぎましょう。里へ出ると道端一面に雨に洗われた赤まんまが生き生きと立上がっています。いよいよ清々しい秋の到来です。

### 薪割の斧にぼつりと初時雨

那須の秋も終りに近づくと、我々のペースにしているログハウスの冬仕度が始まります。雪は少ないが那須おろしは厳しく薪ストーブは欠かせません。そこで薪割りは冬の恒例行事です。大きな斧を力一杯振りおろします。額からこぼれる汗を拭い、一息入れると、脇に置いた斧にぼつりと雨粒が、もう初時雨です。冬の始まりです。

### 老優の語りシャンソソソカフェに薔薇

久しぶりにコンサートへと足を運んだ。ポルトガルギターとマンドリンのデュオに加え俳優の声色とも多さんによる朗読があった。演奏者と声色さんとの出会いは約三十年前のあるシャンソソソカフェ。

「RuRuRuシャンソソソカフェの夜」を聴きながら遠き日のカフェに思いを馳せて哀愁を帯びた音色と心に沁み入る朗読にゆったりとした時を過ごした。

### つくづくし赤子つんつん宙を蹴る

双子の孫が生まれた。春に土筆がつんつん顔を覗かせる頃、バウンサーを揺らしながら元気に足を宙に蹴り上げている。

今では、散歩に出かけると葉っぱやお花、時には蟻をずつと見ていたりする。私も新しい気づきがあり、なかなか面白い。出産時は寂し気であった兄も一緒になって笑っている。いつもパワフルな孫に元気をもらっている。

### 苔咲くや積み上げられし無縁墓

令和三年六月の作。縁あつてある古い寺を訪ねた。墓参を済まし、墓地を一回りすると片隅に苔むした墓石が堆く積まれていた。手前の少し新しい墓石を見ると「功七級」と読める。功七級は兵に叙せられた金鶏勳章だ。軍功を立てた名譽の戦死者のはずだ。その英霊は今や無縁仏である。その無常と時代の変遷に感じ入り、即時即座に生まれた句である。

### 色褪せしキネマ旬報麦の秋

令和五年五月の作。『小津安二郎の俳句』（松岡ひでたか著 河出書房新社刊）を本屋で立読みしていた時出来た句である。小津は俳句を趣味とし、「麦秋」、「彼岸花」、「秋刀魚の味」等題に季語を用いた作品が多い。子供の頃の「麦秋」の映画ポスターの記憶と学生時代愛読した「キネマ旬報」を材とし、小津映画の世界をイメージした一句である。



## 高橋満耶子

石路咲くや終活旅行は地元です  
和歌浦のいつもの眺め朝時雨

私が運転免許を取得したのは、四十五歳の時でした。その免許証もついに返納する年齢になってしまった。

二十年前、夫が定年退職をした時、長年の夢だった「紀伊半島一周」の旅に出かけた。助手席で方向音痴の夫が、地図を片手に道案内を、二泊三日で無事に帰宅。これまで頑張ってくれた車も、廃車になる事になった。

最後にもう一度、二人で終活旅行に地元の和歌浦へ行く事にした。子供が小さい頃は、よく海水浴に来たが、泊るのは初めてだ。海に沈む夕日がとても美しい。早朝、走り慣れた道を急いで、小鳥たちが待つ我が家へ。

今は免許のいらぬ電動カーが足代り、歩道を独りゆっくりと。今までは気がつかなかった、道路のでこぼこや石ころ、季節の草花が、すぐ側にいっぱいある。これからは、新しい目線で、色々な景色を楽しみたい。

## 野村美子

水が自慢の婿の里から朴葉鮓

娘の結納の日に相手方のお父様が開口一番「私の住んでいる所は何もないですが、水が一番美味しいのが自慢なんです」と言った言葉が忘れられない。

婿殿の実家を訪問すると庭に大きな朴の木が一本あった。その朴葉で作った朴葉鮓をこ馳走になった。毎年婿殿の実家から送られてくるのをおすそわけで頂く。朴葉鮓は朴葉酢として、岐阜県の伝統料理として郷土料理として色どり良く、具材もいろいろあるらしい。

時の日や動く恐竜イベント館

今の男の子供は恐竜にはまっている子が多いらしい。私の六才になる孫も大の恐竜好きである。私も小学生の頃に見た本の恐竜にとっても興味を持っていた。当時は架空の生き物だと思っていた。娘から東京八王子市未来メッセの「東京たま大恐竜博」に六才の孫と一緒にに行かないかと誘われた。動く、吠える、暴れる。大迫力の巨大恐竜がやってくるというのだ。行つて驚いた。肉食恐竜、草食恐竜が再現され、動くイベント会場となつていた。世界最大級のティラノサウルスの顔と三人で記念撮影をして大満足の一日を過ごした。

## 横山君夫

磴百段のぼりきる間の時雨かな

数年前、京都市街の西北、高雄山の中腹に位置し紅葉の名所としても知られる神護寺を訪れた。ここは山岳寺院であり、金堂まで行くには四百段の磴がある。

磴を登って行く途中、風が出て急にばらばらと降っては止み、短時間で通り過ぎて行った雨に出会った。名高い北山時雨である。

掲句は、時雨の特徴を寺院の磴との取り合わせて詠んだ一句です。

冠雪のあれが立山冬夕焼

昨年富山へ帰省した時、十二月にしては珍しく晴れていて、夕映えの立山連峰は、実に神秘的な美しさを放っていた。

雪を被った立山連峰が、夕日によって白銀色から刻々と黄金色や丹色の世界に変わっていく姿は、神々しく幻想的でもあった。

掲句は、この大景を詠みたいと試みたが、距離感だけで、あとは季語の持つ情景力に託す一句となった。

# 十月号の巻頭句

季音 雪

炎帝に唸りを嚙ます掘削機

茂木和子

季音 月

廃屋を沈めて迫る草いきれ

井上燈女

季音 花

秋めくや余白の多き水彩画

野田静香

夏季競詠

渴筆の一句の風姿古団扇

柚木治子

鼓笛集

神旗手に駆け上がる坂人馬炎ゆ

本橋稀香

山紫集

生え揃ふ乳歯の白や羽抜鳥

河野はるみ

山本鬼之介 選

水明集

相乗りの他人とまた遇ふコスモス野  
教室に蠅一匹の攪乱者  
秋旱水を乞うたる夫の墓  
夏果てのさざ波なべて岸に寄す  
水盤の余白が語る華の道

さいたま 菅原真理

夏菊や砂丘掃きたる風の跡  
黒帯を捨て身一本夏合宿  
国憂ふ大化以来の極暑かな  
べらべらと同時通訳秋暑し  
潮風に唇乾く晩夏かな

小林京子

八月や平和宣言声高に  
のびのびと育つゴーヤーに影もらふ  
炎天や深呼吸して扉押す  
灼熱の一日の余韻夏の月  
星涼し闇に「富岳」の稼動音

熊谷越田栄子

手開きの鰯の骨の美しき  
豆腐屋の木型干さるる今朝の秋  
住所録繰る秋深深と満つる夜  
診療所の西日遮る青ふくべ  
浜へ曳く網の鰯の青光り

さいたま 梅澤輝翠

眠れぬ夜の鈴虫の声聴き分けり  
隠し鳴かせる鈴虫貴賓待つ離れ  
百選の水から掬ふ新豆腐  
正座して玉音聴きし日や残暑  
新豆腐験の兄の三回忌

新 曆文

溪流を眼下に茶屋の冷素麺  
下町の路地に昭和を葭簾  
母の家の解体を決め桐一葉  
稲妻や秩父連山裂くごとし  
磴上がり杜の静寂破る鶉

岡田宣子

漆黒の床に揺るるや青楓  
高欄の唐金こがす西日かな  
黒服の指揮者の背や汗の染み  
夏山や大巖肌に水のみち  
回廊に細き西日を連子窓

さいたま 池田珪子

健陀<sup>かんだた</sup>多や今日ふたたびの蜘蛛に会ふ  
語部の目差強き広島忌  
店番の長き午後かな夏の果  
一陣の風やり過ごす秋の蟬  
太公望ぼつりぼつりと秋の浜

平塚 丸屋詠子

大般若転読会に落つる紙魚  
東口バルコ夏行の待合せ  
海神と姫百合の聲敗戦忌  
敗戦日あの日おかつばわらざうり  
今朝の秋同胞に否鉄兜

清水桂子

伊奈 菅原卓郎

菩提所の鐘は戦後派敗戦忌  
紙魚食むや書架に坐したる広辞苑  
人知れず宝印ねぶる雲母虫  
ゆるゆると朝餉のけむり稲の花  
初嵐撫づる黒毛の鬣よ

入相の遠き鐘の音桐一葉

反町 修

さいたま 千坂平通

秋暑し貨物列車の軋みゆく  
鬼灯や逝きし娘の里帰り  
青瓢ミスのくびれに優りけり  
秋の日やシャルトルブル―色極む

桐一葉一期一会の意味深し  
物故者を悼む朗読原爆忌  
初秋や恋の終りを告ぐる風  
初秋や水琴窟の音とどく  
初秋や気分一新前進す

譜面なき鈴虫鳴くや裏通り  
鈴虫や終日鳴くは無人駅  
やは肌をさらす岩風呂盆の月  
役解かれ窓辺はすでに秋の風  
大役を果たし胴上げ秋天下

篠崎紀子

本橋稀香

ラジオ体操百日紅を振り仰ぐ  
朝廻りして八月の穂の孕み  
空蟬のなほ爪立つる掌  
三伏の喉につかふる飲み菓  
玩具みな盥に沈み夏ゆふべ

かな女好みの久女も好み秋裕

鈴虫の籠膝に置く銀座線

銀木犀顔の真中は穴ふたつ

平和惚けでよかよと今宵蚯蚓鳴く

父母ゐるた日自噴の水の新豆腐

草庵の煙揺蕩ふ梅雨の明

あの時のまた来る期待走馬燈

目配せを見えぬ振りして蛍狩

土熱る闇には淡き夏の菊

歌舞伎座を翔る代役夏芝居

東雲の空を浮かばせ夏の海

夏の夢乗せ離岸を待つや豪華船

紙魚ひそむ書棚のほひなつかしむ

井戸水のうまさ身にしむ終戦日

鉄びんの湯はまるやかに秋の茶屋

染まり初めし木木に個性や秋めけり

秋早火傷の庭木いとほしく

しなやかに堀に乗る「たま」今朝の秋

潮の香や島に定住したき秋

目一杯に立ちただかるや入道雲

さいたま 森下山菜

衣魚あとを厭はぬ彼女戦中派  
終戦忌幼き姉の生と死よ

二枚貝閉ちて語らず終戦忌

無花果を枝葉押しつけ押しつけて挽く

秋蟬の声降り注ぐ川の町

皆川更穂

三味の音のもれくる家や盆の月  
路地裏に猫の眼ふたつ盆の月

鈴虫を遠くに聴きて睡魔かな

鈴虫を飼ふ少年や茄子畑

掛け声大き子供神輿の世話役衆

山岸久美子

脳天に斬り込むやうな雷来る  
遠雷やそそくさと荷を露天商

雷離り一家こぞりて夏祭

輪踊の菅笠ゆるる佐渡の夏

曲替はり団扇を腰に輪の中へ

西幅公子

三度召集されたる父や終戦日  
敗戦日裏の畑の牛蒡掘る

鉄橋を渡るSL涼新た

初恋のアルバムの顔紙魚齧る

東雲に靴紐を締め風薫る

越谷 阿部幸代

さいたま 霜多光代

杉戸 佐々木史女

さいたま 飯田忠男

面影を寄せては攫ふ土用波  
決断に揺るる眼へ一葉落つ  
差出人不明の便り桐一葉  
音もなく海鷗飛び込む時化の海  
夜行バス眠れぬ窓に星流る

吉川 杉浦千祐

茄子洗ふ昭和を生きし井戸の水  
夏山を歩く修行のごと歩く  
犬吠の荒波砕く南風  
夏椿ことりと落つる手水鉢  
スクープの裏取り確か台風来

さいたま 綿引まりこ

図書館に一番乗りや夏の朝  
高層ビルの窓の西日も秋めきぬ  
古書店にふと足止むる秋めく日  
昔は村とおぼしき湖底秋早  
ぼつんと一軒住めば都と曼珠沙華

さいたま 竹澤和子

なすことのなき八月の万華鏡  
ままごとの「けいちゃん」の今赤まんま  
今年またねぶた肴に手酌かな  
花摺りの浴衣をはしより跳人の子  
背を丸め合せ鏡の秋彼岸

川口 新井のり子

ピエロ消え路上ライブのかんかん帽  
篤農の畑は黄金に紅の花  
鰻屋の使ひ込まれし洪団扇  
蚊遣火や湯殿にのこる無双窓  
峰雲や数字まばらな時刻表

森美枝子

青柿や残し置くもの捨つる物  
山男滴る道を知り尽くし  
白壁や蜘蛛の巣払ふ竹箒  
天井よりすつと一筋夜の蜘蛛  
スーパ―や糖度表示の切り西瓜

若狭 山崎郁子

底紅や表札にある裏千家  
姿見の奥に映れる花木権  
目印の木槿の垣や友の家  
秋簾月島路地のもんじや焼  
秋簾宿より臨む漁港の灯

森 和子

神仏に祈る甲斐無き大旱  
スタンドの勝利に沸くや向日葵群  
楚楚として透けるパツクの茗荷の子  
百選の水を注ぎし冷奴  
平和への言葉で紡ぐ原爆忌

岡本祥子

夏芝居台詞回しのあどけなき

雨宿り水族館の海月かな

柴折戸を引くや朝風涼新た

暁光の木道踏むや秋涼し

二・三本野菊手折るや香漂ふ

さいたま

加藤でん治

孟蘭盆会新人僧のぼんの窪

母逝きて見やう見まねの盆支度

流灯や初恋の人孫連れて

新涼や風を肴に夫の酒

種無しは神の技なり葡萄喰む

若狭

松村登美江

散りばめし棚田の上の星祭

ぐんぐんと浮かぶ蜻蛉よ雲の午後

秋風や街にチャペルの鐘六つ

窓わくに幾何学模様秋の空

模擬店の手際の良さよ照紅葉

石関六弦

さいたま

後記朝香

べたべたの味噌のおにぎり秋初め

白雲の白きままなる秋初め

表札の消えし隣家や秋初め

恋の字の変に見えたる秋初め

人声の静かな朝の秋初め

吉川拓真

一斉に見る八月の夜の大輪よ

八月や夜に弾くる感喜の声

八月の絵日記残り一枚に

八月の犬トリミング服二枚分

鈴生りの荔枝我が家の一大事

緒方みき子

ラベンダー園一望にゆく大リフト

脂のりのり鯛たたきに手前味噌

秋めくや海侮れば海怒る

屋上の庭園無残秋ひでり

秋めく日突如の豪雨道遮断

小川洋子

主を待つ日日草の赤と白

部屋奥へ庭木を映す西日かな

花頭窓一筋折れし古簾

盆僧来裾ひるがへし自転車で

天気図の目玉確り厄日かな

綿貫ひさの

古き住まひに盆棚作り先祖迎ふ

さいたま 森下美智枝

和歌山 嶋田洋子

秋めくや庭師帰りし後の風  
皆が待つ夫の得意な締め鯛  
星座指すレーザー見事夏の夜  
岩魚釣りの古民家残し主逝く

盆の客とひとときや茶の一杯に

篠原さよ子

さいたま 橋爪さなえ

名に「ちゃん」づけの便りの来る晩夏かな  
葉の裏に潜む茄子の実棘太し  
屋号摺る店頭幕に晩夏光  
帰路につくつづら折かな夏惜しむ

香田裕誌

寺町知子

目刺し焼く母の独居を思ひ遣る  
髭剃りの当りしなやか麦の秋  
明け易き漁港の競りや国訛り  
絵説法掲ぐる山門青葉闇  
樹には樹の喜びありて青時雨

湯浅 和

高原和子

乳吸ふ子見守る母の顔に汗  
夏の夕父の背流す三歳児  
夏山やヒュッテの主は大男  
あめんばう魚の頭上すいすい  
木槿一輪茶室に作る静けさや

「こめんね」と言へずなみなみ注ぐビール  
「ミッコ」てふ香水つけて逢瀬かな  
盆僧の真白き足袋に居を正す  
珍客に窓開け放ち青田風  
子鴉の甘鳴き聞こゆ鎮守の杜  
迷ひなく立ち続けたや女郎花  
歳重ね願ひの多き堂の秋  
弁当を包む日常愛し夏  
初秋の長めの散歩街あかり  
丸き背を伸ばして子守り女郎花  
一斉に朝の挨拶日日草  
門前を掃く音色や日日草  
日盛りや金属バットのかるき音  
日盛りやひんやり暗き鳥居奥  
日盛りに信号待ちのポール影  
夕風の心地良きこと草むしる  
草取りを終へて心身軽くなり  
店頭にフルーツ数多西瓜買ふ  
夕立来サロンとなりし八百屋かな  
怒るごと窓たたくなり大夕立



蟬鳴かず体温超えの日々となり  
ひたひたと命の危険熱帯夜  
雹降るや新車の屋根の穴穴穴  
銭湯の廃業知らせ炎天下  
黒髪之母の元氣や鰻食ふ

さいたま 小駒さち子

さぎ草にわづかな風や長崎忌  
こぼれ種の朝顔藍のしほりかな  
原爆忌一口の水に思ひこめ  
ほほゑみて先立つ妹の施餓鬼かな  
終戦日施設の叔母は夢の中

鬼石 榊原聰子

人の世はそれなり楽し生身魂  
残暑なれど一念発起朝散歩  
営農も人に任せる稲の花  
真実の表裏は不明夏盛り  
アーチ戻り地震禍の水路秋の空

春日部 仲田利子

早曉の窓に風入る秋初め  
たつぷりの餡を包みて盆の餅  
御仏と共にすごして門火焚く  
高野山我関せずと女郎花  
夕まぐれ庭に人待つ初秋かな

さいたま 岡田芳春

新豆腐今朝の湯けむり威勢よく  
旅客機と並び行くかに盆の月  
幽くも賑賑しくも女郎花  
初秋やトレンドの色試したく  
小籠包を飛び出すスープ秋祭  
御包みの手足のうのう秋初め  
日陰さへ三十六度初秋かな  
御巢鷹の尾根に合掌をみなへし  
女郎花玉三郎の立ち姿  
空室にベルの音響く残暑かな

さいたま 鳴海順子

桶に浮く海より深い茄子の紺  
朝日浴びゴーヤの葉つばエメラルド  
孫と弾くピアノ音嬉し夏の暮  
好物は茄子のしぎ焼酒旨し  
幼子のいたづら増ゆる晩夏かな

石浜悦子

草加 持永喜夫

道の辺の墓の花立て女郎花  
新秋や新刊本のプロローグ  
羅を出して知りたる母心  
深井戸に西瓜つり上げ覗く蘭  
夜の秋西鶴の女の深情け

羽島秀子

蜻蛉の眼の中にある故郷かな  
秋の燈のゆかし千本格子かな  
稲架解けば棚田にのこる昼の月  
月の出にどよめく通勤列車かな  
農耕馬と別れし時や天高し

さいたま 古池恵里子

手作りの干し梅甘し夏の山  
放れ蟻美食家の手を知りにけり  
ひたすらに地球をまはる蟻の列  
山の辺の茶屋の縁台冷素麺  
島ぢゆうに醬油の匂ひ冷素麺

さいたま 秋谷風舎

亡き友が愛せし庭の赤まんま  
ままごとの小さき茶わんに赤まんま  
武者が舞ひ佞武彦祭の灯が踊る  
姿見にパパと書く兎や蟬しぐれ  
夕立の置き土産とや水鏡

川口 田村福美

園児らのじやんけん遊び秋うらら  
部活より帰る子等待つ桃畑  
生きてゐるあかしと友の桃届く  
ゆれてゐる風のかなしみコスモスよ  
秋の夜や縁切寺の門遠く

山下ユリ子

枕辺の団扇の払ふ夢淡し  
大西日ドラム打つごとと車過ぐ  
夏痩せの顔に添ひたる細き眉  
夏負けに差し出されたるプリンかな  
かなかなに鍵かけ終はる地区センター

大阪 遠藤人美

父と子の鯊日和なり竿の揺る  
甘露煮の鯊の小骨のほろほろと  
玄閥の素敵な靴よ涼新た  
稲びかり田んぼアートの黄金色  
稲妻や片目の閉ぢし道祖神

樋口元美

初秋の空に一筆からすかな  
歩道橋見下ろす町に夏の雲  
初秋やいろとりどりの余生あり  
女郎花風に遊ばれ我ゆらり  
初秋や津軽の音色風にのり

さいたま 鈴木香音子

大夕焼け彼方に黒き貨物船  
鰯を焼く煙が誘ふ魚市場  
迷ひ込む道なき道や夏の山  
山頂に日の出を拝む夏の山  
夏祭り母と抱き合ふはぐれし子

武田重子

和太鼓のリズムに合はせ蟬時雨  
帰省せし娘と同じ孫のくつ  
威勢よく神輿かつぐは下町つ娘  
日々草強き日射しに負けず咲く  
まづは一杯ジョッキなみなみ生ビール

東京 畑宮栄子

溪流にきらり岩魚の朱色の尾  
沢の音幽かに宿の焼き岩魚  
意気揚々朝顔市の鉢を提げ  
老舗閉づるを朝顔市の道すがら  
畦行けば日毎に稲穂頭垂る

宮代 関谷多美子

八月やコベルニクスの唱へ知る  
八月や牛車に乗りて島回り  
苦瓜をゆるりと稚児に触れさせて  
学窓にゴーヤーカーテン子らの歌  
形良しおばあ自慢の荔枝かな

所沢 飯室夏江

網を取り合ふ子供二人や蝉しぐれ  
クレーン伸ぶるビルの谷間や夏の空  
炎天やシヨックも日々の葉とし  
青田風傘寿の背を吹きぬくる  
土用鰻の一尾を分くる夕餉かな

和歌山 南條さわゑ

稲妻や心搏三つ分の距離  
稲妻の言祝ぐがごとと降臨す  
大川を行く屋形船鯊揚がる  
でこぼこの三兄弟の鯊日和  
跳鯊のカヌーを睨む膨れつ面

さいたま 横山礼子

峡谷や雲の切れ間の大夕焼  
遠花火椰子の木揺らす海の風  
ワカモレにライムを添ふる残暑かな  
ドーナツの穴から覗く残暑かな  
星月夜共に踊りし寮の部屋

さいたま 鈴木敦子

厨房の母の足下昼寝の子  
愛猫が隣に待する月見かな  
初嵐店主はぼやき早仕舞  
焼きそばをせがむ吾子の目益踊  
焦げつきし畑地の砂塵初嵐

鈴木藻好

浮き立ちて蟬の二拍子阿波の街  
山深き阿波遍路道蟬時雨  
夏山や水満ち満ちて滴りぬ  
畦行くや金剛杖に蝗散る  
黄金の田に遠き呼び声風渡る

東京 山中いちい

茄子の馬母戻り来る三夜かな  
煮浸しの茄子を供へて母を待つ  
賢きもの無駄に動かぬ晩夏かな  
いそいそと毎夜出掛けて晩夏かな  
念願の徹夜踊りや鼻緒切れ

さいたま 川島夕峰

秋の風「どこでもドア」通り抜け  
影伸びて白露の村は言葉無く  
身の内に秋の来てある日暮れかな  
階段と彼に躓く十三夜

所沢 関根千恵

秋日和寝ながら繰り出す猫パンチ  
ワイン手に馴初め語る夜半の秋  
マダダラのマリア受胎を秋夜かな  
秋の夜やコンボステラへ巡礼者

さいたま 北山建治郎

秋簾網目もほどけ巻き上ぐる  
紅木槿一日花の寂しけり  
秋簾葦の役目も終了す  
木槿垣たどりて巡る城下町

落合和枝

足止まる亀の百態北極殿  
芋の蔓残し葉を食む亀見事  
炎天下車道のんびり牛十頭  
くはえたる芋の葉横取り防ぐ亀

藤沢 小島喜代子

実は小ぶり緑のカーテン秋暑し  
シヨウウィンドー季節先取り秋暑し  
どんびしやりまさかの雨具残暑かな  
秋裕博多の帯の母の声

さいたま 小田三茅

聚雨止み草の匂と蝉時雨  
朝方の雨が上がりて秋茜  
鬼灯は買った次は「船徳」聞きにゆこ

駒谷行雄

盆来れば早く逝かれし父母思ふ  
我八十路秋の湘南女児育つ

藤沢 藤田寛二

晩酌に鯊の肴の取合せ

糸井しるく

鯊釣の男子ドラフト一本釣  
稲妻や天地を分かつ避雷針  
秋夕べ投了となり斟酌す

☆

☆

# 作品評

## 山本鬼之介

### 水盤の余白が語る華の道 菅原真理

水盤は、平たい花器のことである。その素材は殆どが陶器で、金属や他の素材のものもあるが希である。その形は円形や楕円形が主流でその他様々な形がある。花器として花を生けるとともに、同時に水による涼味を味わう。また、花は生けずに、形の良い石を幾つか置いて水を注ぎ、清涼感を楽しむこともできる。筆者が幼少の頃、床の間に置かれた深めの水盤に、石の間を縫って金魚が泳いでいた記憶がある。

華道については全くのど素人であるが、掲句の「水盤の余白」という言葉には大いに頷ける。それは、嘶家の語りや作者の台詞の「間」と共通するものではないかと思う。水盤の余白すなわち隙間を活かす技も華道においての大切な要素なのだと思う。更に思いを巡らせば、「間」は、芸能・文芸すべての分野に共通して言える要素ではなからうか。当然のこと、俳句においても、「余白」間「余韻」を活かすことで深みのある作品に繋がるのではなからうか。

### 国憂ふ大化以来の極暑かな 小林京子

歳時記では、主題の極暑の中に傍題として酷暑があり、両者の差が明確に記されていないので同義的な解釈になると思う。それに対し、広辞苑では、酷暑＝夏のきびしい暑さ、極暑＝極めて暑いこと（暑さの盛り）と記されており、酷暑より更に厳しい暑さを表しているように受け取れる。今年の陽暦の夏（六～八月）の暑さは、近年にも増しての激しいものであり、作者が季語として極暑を選択したことに全く同感である。

さて、筆者は本句の真髓を中七の「大化以来」に認めたが如何であろう。大化は、日本の公的年号の最初の年号であり、大化の改新の六四五年から数えれば千四百年近い年月になる。我が国における気象観測の開始は明治になってからであり、日本の歴史における夏場の暑さを科学的に把握するのは難しい。作者の実感に基づいて今年の異常な暑さを端的に表現する手段として、「大化以来」がまことに大胆で説得力があり、俳句にぴったりの言葉だと思う。

### 炎天や深呼吸吸して扉押す 越田栄子

真夏の太陽がじりじりと照りつける街中を歩いて来て、いま建物に入ろうとしている女性。深呼吸吸して高鳴る心臓を宥めている。数分経って落ち着きを取り戻し、重い扉を押す。

一連の動きを五・七・五の俳句に表したにすぎないが、文字には表されていない余白の部分が感じられる。「深呼吸して」が、その人とのその時の心理状態を言い表している。

手開きの鰯の骨の美しき 梅澤輝翠

海辺の街で育った作者に相応しい俳句である。漁船に曳き上げられてぴちぴち跳ねている鰯を、手で裂いて食うのが最高だと聞いたことがあるが、掲句を読んでその様子を実感できた。鮮度抜群の鰯を、食感ではなく視感で捉えたのが良い。しかも、その対象を身ではなく動きを司る骨にしたことで、俳句の品格が高まった。

新豆腐験の兄の三回忌 新 曆文

収穫したばかりの大豆で作った新豆腐は、豆の香りが残っていて格別の味である。敬愛した兄の三回忌の法要が滞りなく済み、親族が揃ったの膳に載った新豆腐である。多分亡き兄も好んだ新豆腐なのであろうか、想い出話が尽きない。劇作家・長谷川伸の傑作「験の母」を振った「験の兄」が、作者の悪戯心を表している。

下町の路地に昭和を葎簾 岡田宣子

昔の情緒を遺している東京の下町を散策すると心が安らぎ、

俳句のねたが沢山拾える。路地は綺麗に清掃されていて、両側の家々の玄関先には季節の花の鉢植えが置かれていて、通る人の眼を潤す。葎を編んだ簾がきちんと掛けられていて、清涼感が直に伝わってくる。大戦後八十年近い歳月が過ぎ去った今、「昭和も遠くなりにはけり」の心境に浸っている作者。

回廊に細き西日を連子窓 池田珪子

京都が奈良にある大刹の回廊を思い浮かべる俳句である。陽が西に傾き、連子窓の連子の間を通った陽光が、回廊に射し込んでいく。回廊の曲がり角から眺めると、規則的な美しい模様に見える。住宅や一般の建物では味わうことのできない景色なのではなからうか。「連子窓」という地味な素材を活かして情趣のある俳句に仕上げた力量を評価する。

敗戦日あの日おかつばわらざつり 清水桂子

あの日とは昭和二十年八月十五日のことである。「おかつば」と「わらざつり」はあの日作者の髪形であり履物であったのか。筆者もあの日、疎開地の若狭で藁草履で遊んでいたような気がする。御河童の髪形は、今でもあるが呼称が替わっているだろう。藁草履は現在実用されることはないだろう。郷愁にかられる一句である。

入相の遠き鐘の音 桐一葉 反町 修

夕暮時に遠くの寺で撞いている釣鐘の音が聞こえてくる。家路を急がせる音であり、郷愁にかられる響きでもある。一打また一打の梵鐘の音に誘われるように落ちる桐の葉。梵鐘のある寺の境内の桐の木も静かに葉を落としているのだろう。

やは肌をさらす岩風呂盆の月 篠崎 紀子

潇洒な温泉宿の露天風呂であろう。仲秋の名月の一ヶ月前の月であるが、盂蘭盆の夜でもあるから、仰ぎ見る月に特別な感情を抱くのではないか。独りで居る岩風呂に射し込む月光に、若返ってゆくような自分の肌を実感しているのではないか。

健陀多けんただや今日ふたたびの蜘蛛に会ふ 丸屋 詠子

都会で生活していて一日の内に二度も蜘蛛に出会うことは珍しいことかと思うが、それを経験した作者は、これ幸いと俳句に使ったのであろう。ただそれだけでは俳句にする価値が無いので、冒頭に芥川龍之介の小説「蜘蛛の糸」の主人公である健陀多を登場させたのであろう。付き過ぎの感はあるものの、月並句を脱するのに効果があったと思う。

菩提所の鐘は戦後派敗戦息 菅原 卓郎

戦後派の鐘を穏当に解釈すれば、彼の大戦後に作られた鐘ということになるが、佛蘭西語のアプレゲールに重点を置いて考えると、歴史を経た釣鐘とは異質な音を発する鐘であるかのように思えてくる。俳句としての面白味は、この二つの解釈を合体させたところに存在するのではないか。

桐一葉 一期一会の意味深し 千坂 平通

自分の人生に一期一会の言葉を当てはめてみると、今更ながら感銘深い言葉であることが判る。極端な言い方をすれば、生涯の大部分が一期一会に関係しているようにも思えてくる。本句の作者が或る時或る場所で生を受けてから初めて桐の木を見たとする。そしてその時、偶々桐の一葉がはらりと落下した。これからの人生で再び桐の葉の散るのを見ることはないだろうと思つた時、一期一会の言葉が心の中に飛来した。

空蟬のなほ爪立つる掌 本橋 稀香

庭の木の枝にしがみついていた空蟬を剥がし取つて掌に載せたら、恰もまだ生きていて爪を立てたように感じたのである。地中で数年暮らし、やっと地上に出たら七日間で命を閉じる蟬の執念が掌に伝わってきた。

鈴虫の籠膝に置く銀座線 森下山菜

東京メトロ銀座線の乗客が鈴虫の籠を膝に置いている。鈴虫の籠だけでは季語にならないから、籠の中に鈴虫が入っていて、時々美声を発していると思われる。さて、この乗客は何処から乗車して何処で下車するのであろう。いろいろと疑問が生まれて面白い。

あの時のまた来る期待走馬燈 皆川更穂

現代における走馬燈は、高齢者の想い出の中にある夏の風物の一つになったように思えるが、それだけに愛着が強いのかと思う。数十年前、思いを交わしたひとと走馬燈に興じる夜があった。今手作りの走馬燈に火を点したら、絵の中からあの時のひとが現れるような気がした。

鉄びんの湯はまるやかに秋の茶屋 山岸久美子

観光地か古都の大刹の門前にある茶店であろうか。祖父の代から、いや、もっと前から商いを引き継いできた店のよう  
に思える使い込んだ南部鉄の鉄瓶が、リズムカルな音をたてて湯を沸かしている。自家製の田楽や大福・みたらし団子など、客の誰もがほっとする旨い緑茶を添えて出される。紅葉の季節を迎え、鉄瓶も喜び勇んで湯気を噴き出している。

秋旱火傷の庭木いとほしく 西幅公子

今年立秋を過ぎても連日真夏日が続いた。近年にない異常気象の年であり、線状降水帯が発生して洪水を起こすような雨が降る処があった反面、連日旱が続いた処もあった。夏場は勿論、残暑の時期になっても秋の彼岸が過ぎるまで猛烈な暑さが続いた。そのような状態におかれた庭木を、作者は「火傷の庭木」と断言した。まさにその通りである。

二枚貝閉ぢて語らず終戦忌 阿部幸代

一般家庭で食す二枚貝は、蜆・浅蛸・蛤に代表されるだろう。砂抜きしている時も、汁の実にしても口を開かないのがある。彼の大戦で苛酷な体験をした復員兵が、他人はおろか家族とも満足に会話しなかったように、じっと口を閉ざしている貝である。

路地裏に猫の眼ふたつ盆の月 霜多光代

路地裏の暗所に光る物体。よく見れば猫の眼であった。夜空には折からの盆の月が輝き、穏やかな時が過ぎてゆく。

脳天に斬り込むやうな雷来る 佐々木史女

まだまだ遠いと思っていた雷が、突然はりばりががーんと襲いかかってきた。まさに晴天の霹靂である。



## 水琴窟

(水明集九月号鑑賞)

池田雅夫

べしている。「滑らか」が双方にかかっていることに注目。

麦秋や鳥羽谷 一刻暮れそびれ

北山建治郎

满目緑の中に広がる麦畑。他の穀物が秋に黄熟するのに対し、麦は初夏のころ黄熟するのでこの季節を「麦秋」という。山間の谷は暮れるのが早い、「鳥羽谷」は麦の黄色で「一刻暮れそびれ」というのだ。若狭ツアアの思い出の句。

国境さへ容易く越ゆる蟻の列

石関六弦

蟻にとつては「国境」などはない。険しい山も蜿蜒と続く「蟻の列」。ひたすら先へ先へと延びてゆく。疲れなど微塵も感じない。蟻には蟻の通行手形があるのかも知れない。

心太四方山話 尽きぬもの

鳴海順子

世間のさまざまな話をしている。気心の知れた友と、近所の噂話、今話題のスターのこと、体のことなど話のたねは尽きない。「心太」は心太突きで軽く押しだす。「四方山話 尽きぬ」と呼応する。「尽きぬ夕」としたらいかかなものか。

川風に五線譜 描く夏の蝶

飯塚智恵子

蝶の舞う姿は特徴的で真つ直ぐには翔ばない。「夏の蝶」は揚羽蝶の類が多く、「川風に」負けずに翔んでいる。それが五線譜の音符のように思えたのだ。「五線譜 描く」と一歩すすめた勇氣にうたれた。川の象形文字が五線譜に重なる。

蜘蛛の囿の軽くしなやか風の中

古池恵里子

庭先などで蜘蛛の巣がいつの間にか張られていて、蝶やトンボが掛かってもがいている場面を見たことがある。夕日に光る「蜘蛛の囿」は美しい。時々風を躲す術は「軽くしなやか」そのもの。嫌われ者の蜘蛛をこよなく讚美している。

目をつむり風を探るや夏至の夕

新井のり子

日の出から日没までの時間が一番長い「夏至」。北半球では太陽が最も高いところにある。「夏至の夕」の火照った体を冷ますべく「風を探る」感覚を研ぎ澄ましている。目に見える風を、あえて「目をつむり」と詠んだ勇氣を称えたい。

母の手の老いて滑らか百日紅

岡田芳春

高齢な「母の手」は軟らかく「滑らか」なのでしよう。滑らかな手は健康である証です。規則正しい暮らしが目に浮かびます。「百日紅」の幹は名前の由来のとおり、すべす

煎餅の少ししなやか梅雨兆す

川村 治

袋を開けた「煎餅」はたちまち湿気つて軟らかくなつてしまつた。それで梅雨の近いことを感じたのだ。「梅雨籠」や「梅雨じめり」ではなく「梅雨兆す」が活きている。それにしても歯が丈夫でないとき堅い煎餅は食べられない。

在りし日の祖母の手解き梅仕事

松村登美江

「梅」の実ほとんどが梅干しにされる。他には焼酎に漬けて梅酒に、砂糖に漬けて梅シロップに、酢に漬けて梅ジュースにもできる。まめで料理上手な「祖母の手解き」を受け、深い愛情と感謝の気持ち表れている。さあ梅の季節だ。

著莪の花水音高き水路

湯浅 和

見沼代用水に限らず、見沼にはたくさん「用水路」がある。その土手に「著莪の花」が咲いている。田植えをひかえた用水路には勢いよく水が流れている。日陰に群生する著莪ではあるが、用水路の「水音高き」に力強く咲いている。

蕃椒花束となり吊さるる

関根千恵

香辛料としてなじみの「蕃椒」。収穫した蕃椒の茎を束ねて軒下などに吊して保存する。吊されて真っ赤になった蕃椒は鮮やかで花束のように見えたのだ。素直な句に共感する。

玉川の細き流れや桜桃忌

柳父はる

「桜桃忌」は太宰治の忌日。玉川上水で入水した。それを踏まえての句。普段の玉川上水の水量はさほど多くはないが、田植えの時期には勢いよく流れる。目の前の「玉川の細き流れ」を見て、これでは入水できないだろうに思っている。

点滅の信号ぼやけ梅雨の街

樋口元美

「梅雨の街」のぼうつとした光景を「点滅の信号」で表現したところに独創性を感じる。交通量の少ない交差点で見られる信号の点滅。あるいは歩行者用の信号の点滅か。そんな静かな街の梅雨のけだるさをさりげなく詠んでいる。

嫁に出す親の心境桐の花

川島夕峰

桐の成長は早く、箆筒の資材にされることで女の子が産まれると桐を植える風習があった。「嫁に出す親の心境」は喜びと寂しさが入り混じった複雑なもの。「心境」を具体的に、たとえば「涙や」とすることで、より共感を得られます。

菌騒ぎをれど負けずに盆踊

藤田寛二

「菌」というのは「コロナウイルス」のことであろう。ここ数年、コロナ禍で夏祭などが開催できなかった。それが今年になって規制が緩和され、「盆踊」が再開されたのだ。

大村節代 選

鼓  
笛  
集

狛犬の宙に吠えたき星月夜  
男衆もさつと化粧の辻踊  
古井戸に呼び水ながす震災忌

菅原卓郎

父親に抱かれ踊るや風の盆  
二胡の緒を少し強めて踊唄  
し の の め や 音 う す れ 行 く 風 の 盆

池田珪子

陽が落ちて鈴虫鳴くや旅の宿  
揺れ合ひて触れ合はぬ葉の女郎花  
女郎花泣き出しさうな空の色

篠崎紀子

夏の旅写真に残すたらひ舟  
たしかめの石投げて見る秋の水  
見える秋見えない秋や雲流る

佐々木史女

信濃路や右に左に蕎麦の花  
快晴の札所めぐりや蕎麦の花  
花蕎麦の香りをのせて巡礼者

反町 修

物語走り出しそな銀河かな  
鳩待峠下るせせらぎ秋涼し  
草の花野に散るやうに逝きし君

加藤でん治

潮風に育つ岬の青蜜柑  
向きむきの牛に残照秋の色  
子らの声消えて川原に秋立ちぬ

西幅公子

名月やクリーニングに一着を  
来週は彼女と会へる今日の月  
ほろ酔ひにほど良き風の良夜かな

吉川拓真

マリンバの音をどり出す今朝の秋  
木管の音みづみづし露の朝  
マリンバの奏者の眼秋の水

熊笹に縋る急登敬老日  
梧桐の実の船出かな風の音  
疎ましき夫の偏食秋茄子

夜習の娘聴き入る紡ぎ唄  
夜学生頬の汚れもそのままに  
夜学校牛乳瓶に花一輪

キャンプの火燐寸擦れる子擦れない子  
枝豆の終り初物おすそ分け  
朝顔の美しき隈取り団十郎

帰還せし旗艦を襲ふ百合鷗  
鮫鱈鍋来るな来るなの勿来かな  
蜜柑島宿出迎への旗二つ

菊人形一分の魂ありにけり  
秋天や稜線埋むる人の列  
口実是谁かにまかせ温め酒

山岸久美子

阿部幸代

北山建治郎

森美枝子

秋谷風舎

山下ユリ子

襟元の外すばたんやあいの風  
順番の入浴タイム流す汗  
月明り一人家路のヒール音

御仏は前屈みなり彼岸花  
初嵐若き僧侶の竹箒  
ふはふはの鰯団子や海の宿

やあやあと呼び名出て来ぬ残暑かな  
掃き清む庭へやからの秋彼岸  
新米に思はずグーと腹の虫

新豆腐村一軒の豆腐屋さん  
蕎麦の花平家の里の六地藏  
宵闇やタンクコンテナ駆け抜くる

ぶどう好き黒か緑で言ひ争ひ  
秋の雲旅に誘ふかふはふはと  
しつかりちやつかりうつかりの三人秋の旅

望の夜や桃尻娘フラダンス  
竹の春父母あれば肩たたき  
夜汽車乗り夢追ひかけて小夜時雨

武田重子

湯浅和

安倍弘夫

樋口元美

畑宮栄子

佐藤克之

## 鼓笛集作品評

大村節代

男衆もさつと化粧の辻踊 菅原卓郎

辻踊は踊の夏の季語。盆踊は念仏踊を起源とし、盆に彼の世から迎えた霊を供養して、彼の世へ送り返すという行事である。全国へ広まり、古い街並みや辻などに人々が集まり、輪になって踊ったり、列をなして街中を踊り回る。阿波踊りをはじめ今も各地で行われている。

その辻踊の男衆も、踊笠や手拭の下にうつすらと化粧しているという中七にひかれた。あの世からの霊に対しての礼儀なのであろうか。

しののめや音うすれ行く風の盆 池田珪子

風の盆を詠んだ三句。前句と同じ盆だが、こちらの盆は秋の季語で、風の神を静め、豊作祈願を願うという。この風の盆は毎年九月一日から三日にかけて富山市八尾地区で行われる。

越中おわら節を哀調ある胡弓の音にのせて、男踊、女踊の地元の踊手と観光客も加わって夜の更けるまで踊る。そして三日目の夜は、胡弓の音もだんだん、小さくなり闇に消えていく。風の神を鎮め、豊作祈願も成就したのであろう。

鼓笛集巻頭（九月号）

私の好きな一句（自句自解）

本橋稀香

コスモスやAKBやらNiziUやら

女性アイドルグループの名前です。

これでもかという数の着飾った女の子達が繰り出して歌ったり踊ったりする様は学芸会の様でもあり全く興味は無いのですが…。

兼題がコスモスだったので散策で近所のコスモスを巡っていた時に一陣の風が吹き、ザワッとコスモスが頭をもたげ一斉に揺れました。少女達の姿がオーバールップしました。

揺れ合ひて触れ合はぬ葉の女郎花

篠崎紀子

秋の七草の女郎花の花言葉は「美人」とか。女郎と言うとかく傾城、遊女を思ってしまうが、「上臈」の転からとも言われる。

風に揺れる女郎花は、沢山花をつけても、その葉はあくまでも脇役に徹している様が伝わる。楚々とした景を上手に句にしている。

俳誌望見 染谷風子

「暖響」

二〇二三年八月号 通巻第六一七号  
江中真弓 発行所 埼玉県春日部市

九〇〇号続いた『寒雷』の後継誌として、平成三十年八月創刊。八月号は五周年記念特別号である。

江中真弓詠「緑林抄（六十一）」より五句。

武蔵鏡の葉の大いなる夏来る

柳絮とぶ遠き日向に身ほとりに

葭切や川より低く人住める

戦争を止めぬにんげん抱卵季

ふところに幾万の生青葦原

一句目、生命感溢れる夏の到来の讃歌である。中七の「大いなる」は連体形であるが下の「夏」を修飾していない。中七で切れて下五の「夏来る」を強く印象づけている。二句目、白い綿のような柳絮が遠方に又作者のほとりにふわふわと飛んでいる長閑な晩春風景である。三句目、春日部市を中心とした埼玉県東部は低地帯であり、古利根川が春日部の市街を流れている。この句から古利根川の河原で啼く葭切の賑やかな声が聞こえて来るようだ。四句目は人間の尊厳を詠み、五句目は万物の生命を詠んでいる。これらの句より筆者は楸邨の句を思い起す。いずれも出征した教え子を思う句である。

幾人をこの火鉢より送りけむ 『雪後の天』

生きてあれ冬の北斗の柄の下に

同人欄は、「春信集」、「夏清集」、「秋韻集」、「冬愛集」の

四部構成である。「春信集」より三句。

立葵 四、五本警察官の家

轉りを入れて茶室の四畳半

袋掛いつかすべてが明らかに

「夏清集」より二句。

幾万の戦没学徒梅雨の闇

俳号は本名のまま農詩人

「秋韻集」より二句。

晩学の大学の窓桐の花

九十五歳誕生祝ふ桜鯛

「冬愛集」より一句。

田を渡る風の青さよ更衣

令和五年度「暖響賞」受賞作品の高橋邦夫氏の「翡翠」よ

り三句。同氏は平成二十七年「埼玉県現代俳句大賞」受賞

の実力者である。

子猫抱く少女聖母のまなざしに

咲ききりし牡丹のどつと崩れけり

命ひとつ生きたる証し蟬の穴

本誌は俳句の他に、評論、小説、エッセイ等を掲載し、全体を通して詩的探究心を志向する強い意気込みが感じられる。

網野月を選

山紫集

御仏の顔彫る朝涼新た

湯浅 和

谷底の風吹きあがり涼新た

山岸久美子

新涼や行人目鼻とこのうて

松井由紀子

こだまして深山新涼つれてくる

山下ユリ子

新涼の珈琲は濃し長電話

菅原真理

新涼や足引き摺りて遍路宿

山中いちい

新涼やにつこり笑ふ籠の鳥

石田慶子

裏庭に残る箒目涼新た

横山君夫

新涼やサインボールのひたすらに

曲淵徹雄

今宵星ひとつ流れて涼新た

横山礼子

新涼の山の頂よりメール

越田栄子

新涼や株の上がりをベンチにて

吉川拓真

新涼や沈下橋行く路線バス

鈴木玲子

新涼や学びの裏の遊び事

鈴木藻好

竹とんぼ空突つきりて秋涼し

後記朝香

新涼のサナトリウムを風の道

小林京子

—以上特選

新涼の風をまとひて朝鏡

綿引まりこ

新涼や風切羽の軽やかに

上戸千津子

里山の空よ棚田よ涼新た

青木鶴城

少年の産毛きらきら涼新た

内田恵子

新涼の牧場のミルク懐かしし

秋谷風舎

新涼やインク新たにガラスペン

梅澤輝翠

新涼や夜明け間近の龍馬像

新 曆文

行合の空よ瀬音よ涼新た

梅澤佐江

新涼の花屋にふつと吸ひ込まれ

阿部幸代

新涼の音をひびかせ神楽鈴

大場順子

新涼や今朝の散歩は二キロ弱

荒井俱子

新涼の湖の風呼ぶ遊覧船

岡田宣子

涼新た此処も見沼代用水

飯田忠男

夜やふけぬゆきあひの空秋涼し

加藤でん治

新涼や谷中の端にマリア像

池田珪子

新涼やそつと窓開け深呼吸

川島夕峰

借景の峰の大見得涼新た

池田雅夫

新涼の葉ずれや沼をもう一周

熊倉千重子

新涼の髪ていねいに梳る

石川理恵

傘傾げ擦れ違ふひと涼新た

河野はるみ

大声で人を呼びたき利根新涼

井上燈女

新涼や積読本を手にとりて

小駒さち子

縁台に新涼の風さはさと

井上玲子

新涼の海に出でいく豪華客船

後藤綾子



纏ひつくカーテンレース涼新た

近藤徹平

新涼の鎌倉古寺の縁に座す

関谷多美子

明六つの掃き出し窓や涼新た

榊原聰子

もう来ない人のボトルが新涼のバー

瀬戸雄二郎

新涼の孔雀短き羽づくろひ

佐々木史女

新涼のアテネ・フランセ新講座

染谷風子

新涼や寺ヨガ後の御説法

笹本啓子

新涼や警策響く坐禅堂

反町 修

新涼や遺言書きて背を正す

篠崎紀子

新涼や湖の風受く露天風呂

高島寛治

新涼や入魂の作決め難し

篠原さよ子

新涼や駅舎のピアノ奏でをり

高橋満耶子

出刃をとく研師無口に涼新た

渋谷きいち

新涼や河童橋から穂高岳

武田重子

秋涼し公園の朝活気づく

清水桂子

新涼や絵皿に盛るも魚料理

田中章嘉

山裾の荘の便りよ涼新た

下川光子

窓開けて不意の演奏涼新た

飛永 鼓

御手洗の透くる水底涼新た

霜多光代

新涼や塩の道行く牛と人

仲田利子

新涼に「学び直し」を検索す

菅原卓郎

新涼や左近の像に願ひ託し

南條さわゑ

新涼や貪るごとく深呼吸

杉浦千祐

新涼や朝の散歩の距離伸ばす

西浦千枝子

開け放ち青畳に寝涼新た

西幅公子

バンダナの植木職人涼新た

町野広子

新涼や有明の月紙の月

野口和子

産土に祝詞高々秋涼し

松宮保人

新涼の足取り軽し栄螺堂

野田静香

群離れ飛べぬ一羽に添ひ新涼

松本光子

新涼の伊根の舟屋の朝御飯

野村美子

新涼やそぞろ歩きの古書店街

丸屋詠子

新涼や孫台風去り日常へ

畑宮栄子

新涼や枯山水に湧く瀬音

丸山マスマ

涼新たボジョレーヌーヴオー予約の季

原田秀子

新涼や老若ともに戦争展

宮崎チアキ

新涼の朝の目覚めの心地良し

樋口元美

初物を笑うて食べる涼新た

持永喜夫

新涼やテラス席には二人連れ

日高道を

新涼の野を恋ふ神馬いななけり

本橋稀香

新涼や近江の人と行く蕎麦屋

檜鼻ことは

新涼や海へと抜ける切通し

森 和子

新涼やしくじつた日聴くヨーヨーマ

福田千春

新涼や先客のあり露天風呂

森川義子

グライダーに乗りたる心地涼新た

保坂翔太

待望の新涼の風全身で

森下美智枝

涼新た苦行を終へしあかときの

正木萬蝶

街騒に秋の涼よふ一里塚

森美枝子

## 山紫集作品評

### 網野月を

御仏の顔彫る朝涼新た 湯浅 和

「涼新た」な、つまり清新な朝(あした)に彫像の仕上げとして顔を彫り付けている。「夜の秋(よのあき)」「朝涼(あさず)」「は夏の季語であるが、季節をもう少し進めてみれば、「涼新た」を朝に感じることで良いではないか。季節の順番から言って、朝晩の涼味を感じるこそこそが人として至極当たり前のことであろうと思うのである。

「御仏の顔」を彫るからこそ、清新な気持ちになれるのですね。

新涼や行人目鼻ととのうて 松井由紀子

今年の夏は暑かった。猛暑は長く長く続いた。そうした今年の夏を想うと、一層の感慨がこの句によって惹起される。暑さに顔が歪んでいたのだが、新涼に抱って行人(こうじん・ゆくひと)の顔にゆとりが出てきた。座五の「ととのうて」

は所謂ウ音便であって、「整ひて」のはずの表記を優しい音韻に変更して、且つ座五の終いを「……て」止めにしてるのである。上五の切れ字「……や」に対応して抜群の効果を創り出している。

新涼の珈琲は濃し長電話 菅原真理

上五中七の句意からして、文字通りの断定句である。断定句の場合は、句意に副って季語を取り合わせものだが、掲句はそのよく見る構図ではない。季語は句意に含まれていて、座五の「長電話」が句題のように存在感を持っている。

固定電話のくるくる振じれている所謂コールコードが、その振じれを乱してしまうのは、受話器を右手と左手に何度も持ち帰るからであるそうだが、この電話も同様であろう。

新涼やにつこり笑ふ籠の鳥 石田慶子

鳥は笑わないのだが、作者は「籠の鳥」を笑わせている。上五を「新涼や」として季語と切れ字「……や」で、いったん切れを作り出して、季語の本意を全面に押し出している。夏の季語「涼し」とは全く異なる「新涼」は爽やかさや清々しさを本意に含みつつ、不可逆なその涼しさは、夏という盛期には戻らないという寂寥感を伴うものである。そうでなくては韻文の季語としての役目を果たすことは出来ないのである。つまりこの鳥の笑いには、ニヒルなまでの寂しさが込められていると読むことも出来るのである。要するに作者の心の鏡として目に映った光景なのである。

## 新涼やサインポールのひたすらに

曲淵徹雄

「ひたすら」動き回り続ける「サインポール」は理髪店の象徴である。筆者は理髪店のそれと解釈した。嘗ては理髪店が外科医的な施術を行っていたとかで、赤（動脈血）、青（静脈血）、白（包帯）を意味したという俗説もある。上五の「……や」切れを座五の「……に」で受けている。省略が効いていて巧みな句作りである。

## 新涼や沈下橋行く路線バス

鈴木玲子

「沈下橋」は「ちんかはし」とも「ちんかきょう」とも音読するようだ。「永久橋」に対する用語もしくは概念ということになっている。橋は低く設計されていて、川の景と橋の景が一体化して視野に飛び込んで来ている。その「沈下橋」を今将にバスが渡っているのである。作者はそのバスの走る様に「新涼」を感じ取っている。川の反射光、河原の緑の色味、そして太陽光を受けたバスの色具合が初秋を感じさせるものであったのである。視覚的な情報が体感に転化して詠まれた句ではないかと思考する。

## 新涼や学びの裏の遊び事

鈴木藻好

物影が見えてこないのだが、座五の「遊び事」で読者に造景を任せているのが掲句の意図するところであろう。筆者の考えでは、そこには「遊び事」の延長線上にある学びが潜んでいるのである。

## 新涼の山の頂よりメール

越田栄子

何合目からであろうか、登山の途中で急に視界が展げて、山海を一望することがある。もちろん山頂でもよいのだが、遠く山脈を一望する小檜のようなロケーションでも良いだろう。一変した山の景を写メして送信するような心持なのである。一句仕立てにして心持の爽快さを表出している。巧くスマホの電波が繋がればよいのであるが。

## 竹とんぼ空突つきりて秋涼し

後記朝香

清清しさの極みのような景を詠んでいる。座五に季語「秋涼し」を配している。作者は「竹とんぼ」の翔ぶ様を見て、ふっと新涼を感じ取ったのである。であるが、もしかしたら回顧の句とも解釈できる。「秋涼し」を感じ取る頃になると嘗て遊んだ「竹とんぼ」を思い出すとも解せるのである。

## 新涼のサナトリウムを風の道

小林京子

中七の後に「訪れた」を省略している。そしてサナトリウムへ通ずる道は「風の道」であった、と筆者は解釈した。世間とは隔絶したサナトリウムは、「新涼の」中にあつた。「新涼の」の中を訪れたことで、訪ねる作者と、見舞いを受ける人物との関係性が臚げに表現されている。他に確とした情報は無いのだが、それ以上にその場が「風の道」であることが重要なのである。この風の在り様を作者は心に留めているのである。

# りんどう忌の記



越田 栄子

第五十四回りんどう忌が九月二十九日にさいたま共済会館に於いて修された。

参加者は三十六名。兼題「りんどう忌・かな女の忌」「葛の花」の二句を投句。

この日は中秋の名月。会場には、かな女師のお人柄が偲ばれる温和な遺影が置かれ、供えられた、すすき・りんどうなどの花々に秋の深まりが感じられた。

司会の日高道を氏より開会挨拶の後、かな女師への黙祷を捧げ、山本鬼之介主宰の挨拶を頂き句会へと移った。(投句総数七十二句 互選五句。季音雪欄作家選十句)

## 喜寿のお祝

今年喜寿を迎えられた梅澤佐江さん、秋谷風舎さんに主宰より俳号を詠み込んだ句が書かれた色紙と色紙掛けが贈られた。  
おめでとうございました。

①佐渡へさどへと②江戸紫の秋の風  
竹林精舎あらば畏む秋の風

鬼之介  
鬼之介

ご芳志の披露

石井喜恵氏

披講

保坂翔太氏・曲淵徹雄氏

## 主宰詠

深く黒雲去れよかな女の忌  
花葛を視る肉眼の解像度

## 主宰選

天

連嶺の雲は動かず葛の花



りんどう忌会場風景

水尾

地

紫の小物をひとつかな女の忌

道を

ありし日の句座の師の笑みりんどう忌  
和やかに句友の笑顔りんどう忌  
かな女忌や声かけ合ふて洗ふ句碑  
荒畑を己が天地と葛の花  
寺めぐる風にかをるよ葛の花  
葛の花「いつ死んでも」は絵空事  
峠越ゆ蔓奔放に葛の花  
武蔵野の台地色づくりんどう忌  
庭下駄で慈顔の先師りんどう忌  
川音をのせる夕風葛の花  
彼の岸へ渡る吊橋葛の花  
太筆で細字を書かむかな女の忌  
かな女忌や伯母の句集に声聞こゆ  
秘密基地覆ひつくして葛の花

水尾  
義子  
喜恵  
チアキ  
千重子  
更穂  
真理  
久美子  
茂子  
徹雄  
徹平  
和葉  
知子  
由紀子

もみくちやの車窓に映ゆる葛の花  
掃除終へ句碑に花束かな女の忌  
葛の花人目を避けてにほひけり  
花葛のうすむらさきや坊の陰  
雑草といふ草はない葛の花  
葛の花裏門通の次の路地  
天と地と風たをやかにかな女の忌  
「水明」といふ大河の起源りんどう忌  
かな女の忌年ごと薄る句碑の文字  
句碑なぞるあまたの人やかな女の忌  
普段着の言葉尊しかな女の忌  
かな女の忌句碑に温もり宿りけり

鶴城  
翔太  
章嘉  
道を  
風舎  
月を  
まりこ

人

名月に面ざしあらむかな女の忌

由紀子

天・地・人 色紙授与

千重子

雑草といふ草はない葛の花

風舎

道草や花葛摘みて簪に

翔太

峠越ゆ蔓奔放に葛の花

更穂

葛の花裏門通の次の路地

月を

花葛の色に尊師を「牟良佐伎」を

佐江

武蔵野の台地色づくりんどう忌

真理

天と地と風たをやかにかな女の忌

まりこ

牛飼ひのいつもの径に葛の花

輝翠

庭下駄で慈顔の先師りんどう忌

茂子

「水明」といふ大河の起源りんどう忌

佐江

かな女の忌師の下駄の音近付きぬ

宣子

川音をのせる夕風葛の花

徹雄

かな女の忌年ごと薄る句碑の文字

節代

葛の花天の磐戸の舞台跡

徹平

彼の岸へ渡る吊橋葛の花

徹平

句碑なぞるあまたの人やかな女の忌

輝翠

葛の花鼓動曳きさずる蔓橋

義子

太筆で細字を書かむかな女の忌

和葉

普段着の言葉尊しかな女の忌

静香

遙かなる若狭の山河りんどう忌

風子

かな女忌や伯母の句集に声聞こゆ

知子

かな女の忌句碑に温もり宿りけり

栄子

——以上超特選

短冊授与

秘密基地覆ひつくして葛の花

由紀子

高得点者の発表と商品授与

いにしへの浦和銀座やかな女の忌

鶴城

初恋のふるさと野道葛の花

公子

一位 染谷風子 二位 松井由紀子

母は子を子は母を恋ふかな女の忌

月を

煮豆ことごとく噴きて差水かな女の忌

きいち

三位 宮崎チアキ 四位 近藤徹平

君を待つ弁天島に葛の花

節代

かな女忌の丸を描いて待つ月夜

かつ子

五位 曲淵徹雄 六位 石山かつ子

拔露地を行けば潮の香葛の花

マスミ

葛咲くや背負子の重き木の根道

風子

七位 日高道を 八位 星野和葉

山路暮れ小雨に烟る葛の花

喜恵

恋心葉叢に隠す葛の花

稀香

薺めきて天奪ひ合ふ葛の花

茂子

桐下駄履く清しき面輪かな女の忌

マスミ

主宰の全句に亘る丁寧な講評を頂いた後、

一山を占めて雨待つ葛の花

かつ子

日に一本の村のバス待つ葛の花

宣子

網野月を幹事長の閉会の辞を以って無事終了

捨畑を覆ひ尽くせり葛の花

栄子

枯れながら咲き上りけり葛の花

京子

した。 各受賞の皆様おめでとうございました。

——以上特選

修

## 句集喝采

## 曲淵徹雄

### ◆宮本奉子「華麴」

東京四季出版

著者略歴 昭和十八年北海道生。平成十年中田水光に師事。平成十七年「雅楽谷」創刊同人。俳人協会会員。俳人協会埼玉県支部世話人。

著者の第二句集であり、第一句集「綿菓子」のあと平成二十三年から令和三年までに詠んだ句をまとめたとして、著者がとがきに記す。句集名は、「商ひは黴の華なり麴室」より。

家猫も一つ歳とる年迎ふ  
おむすびの転がる童話山笑ふ  
洋皿のパセリは除けて母明治  
もらひ湯も昔語りや月仰ぐ  
水嚙んで菓飲み込む冬日向  
身近な生活の景が、飾り気なくすんなりと心に届く。  
縦横に机を正し卒業す  
知り尽くす峡の風向き鯉のほり  
雲梯の交互につかむ秋の空  
冬空へゆつくり届く観覧車  
以上四句、じっくりと観察し、視点を定めて一句に。

半夏水主治医手加減なき治療  
唐辛子炒めていやな人忘れ  
十月や思考停止のロダン像  
これらの笑いを誘われる句もある。筆者は身辺の句材を大事に、さらにゆたかに句を詠まれていくのであろう。

### ◆石井喜恵「風を踏む」

東京四季出版

著者略歴 昭和十三年東京都生。平成十五年「水明」入会。平成二十三年水明賞。平成二十七季音賞。現代俳句協会会員。

著者の第一句集。六十歳を過ぎた頃に俳句を初めて、二十有余年経ち、来し方二十年の句を纏めたとして著者あとがきに記す。句集名は、「葛の花風を踏み行く山路かな」より。

春寒し角の突張る紙袋  
出棺の傾く不思議な霧ぐもり  
黴匂ふ小引出しより母子手帳  
秋めくやふんはりほかす頬の紅  
縄飛びの少女楢円の影の中  
手袋にさよならの指仕舞ひけり  
いずれも繊細な感覚でとらえた景が浮かんでくる。  
攫はれて行くならこんな春の風  
芋つるり無邪気に好きと言へる仲  
退屈な上座にありて忘年会  
以上三句、茶目つ気を出して、おおらかに詠んだ句。  
菜の花や世話女房でありし頃  
合歡の花透かし明日が見えさうな  
初茵我が人生の第三章  
寒椿熾火ひとつを胸におく  
これからも凜として俳句の道を進まれることでしょう。

# 水明例会

## 第一例会（浦和）

特攻の遺書の滲みや秋真昼  
 權の音川面を滑る秋の昼  
 方墳に鳥の声なし秋早  
 秋の昼口上続く東西屋  
 方言に温もる心秋の旅  
 重鎮の今日は裏方秋祭  
 秋の昼諸草なびく郭跡

境延昭  
 木和子  
 和子報

マスミ  
 卓郎  
 千祐  
 喜恵  
 和子  
 以上特選  
 拓真  
 京子  
 節代  
 由紀子  
 徹平  
 はるみ  
 卓郎

## 第二例会（東京）

静けさの戻る渚や秋の昼  
 円墳より方墳へ継ぐ虫の声  
 歪む街陽射しに惑ふ秋の昼  
 囃子方女子が一人村祭  
 方針は即に行動鉦叩  
 避暑地いま閑かになりぬ秋の昼  
 木洩れ日を揺らす風音秋の昼  
 風の益闇揺らしゆく囃子方  
 三角乗りの昔を思ふ秋の昼

山中みどり  
 青木鶴城  
 報

喜恵  
 順子  
 千祐  
 和葉  
 延昭  
 稀香  
 チアキ  
 マスミ  
 和子  
 以上特選  
 敏江

## 第三例会（東京）

青き空ひとり蟬螂瞑目す  
 蟬螂や会いたくないと言つたはず  
 萩も見ず僧侶急ぎて門を出づ  
 訪なふを銅鑼打ちて告ぐ萩の寺  
 太陽を掴み取るかや祈り虫

東ぬれば沈金の艶秋の草  
 家中に秋草を活け野のごとし  
 風よ吹けこぼれてこそその萩の花  
 八千草の移り香まとふ影二つ  
 秋草や栄枯久しき野面積  
 秋蝶や謂れ哀しき壇ノ浦

川風に不意を衝かれし秋の蝶  
 無造作に活け秋草の様になる  
 なぐさみに八千草もちて母の床

五明  
 曲淵徹  
 雄昇  
 報

いちい  
 峰雄  
 りこ  
 みどり  
 鶴城  
 順子  
 理恵  
 千祐  
 昇  
 以上特選  
 雅夫  
 理恵  
 萬蝶





骨董と並ぶる一つ椿の実

ちぎられし千草たゆたふ小舟かな

せせらぎに秋草映す陽の光

秋草の翳あるやうにうねりをり

ちひろの絵のやうに千草に立つ少女

大甕に風ごと活くる秋の草

### 第四例会 (浦和)

境 延昭 報  
石井 喜恵

赴任地にひとり手酌の今年酒

花蕎麦や古道に今もしるべ石

母の居ぬ故郷とほし蕎麦の花

花蕎麦を左右に分けて札所寺

一村は過疎化に耐へて蕎麦の花

老いてなほ話弾むや今年酒

湖暮れて新酒「真澄」の酔ひ心地

跡継ぎの起死回生の新酒かな

花蕎麦や崩れかけたる水車小屋

手作りのごつきぐい呑み新走

蕎麦の花似合ふ木造旧校舎

新走老いし杜氏の祝唄

まなうらに父の酔顔今年酒

信濃路や右に左に蕎麦の花

仙人の言葉少なし蕎麦の花

玉砂利踏む先づは神饌新走

徹雄

星歩

康世

順子

昇

### 第五例会 (浦和)

梅澤 佐江 報  
河野 はるみ

秋簾美しき京菓字京言葉

一片の雲を見送る秋簾

秋簾置屋の奥に人の影

残り香の薄闇独り秋簾

灯が洩れて一日の暮色秋簾

吾の五感研ぎ澄ましゆく芋嵐

手をつなぎ急ぐ下校児芋嵐

灯が洩れて夕づく秋簾

賑はひを軽く留め置く秋簾

折鶴は色褪せぬまま秋簾

末席に座るも風の秋簾

喧騒を抜けて波音秋簾

京言葉はんなり交はず秋簾

秋簾祝の並ぶ商家町

### 若松例会 (京橋)

正木 萬蝶 報  
石田 慶子

間引菜に残る土の香朝厨

カフカを語る君を隣に天の川

星河ゆく千の折鶴銀の翼

生家なる土の堅さや天の川

天の川下駄の歯音と江戸小紋

銀漢や銀の指輪の寡婦となり

銀浪や一つはウルトラマンの里

吐きとほす嘘が誠に天の川

渋滞のはるかな車列天の川

天の川音を殺して玄関戸

雨上がり夜半に流るる天の川

発見に至らぬ散弾天の川

帆船の時折過る天の川

上高地穂高を統ぶる天の川

切通し行手に掛かる天の川

天の川帰るピエロの遠まなざし

銀漢の粒となれるや今宵なら

天の川夫の自慢の望遠鏡

魔校に子ら肝試し大銀河

東に吉原西にはカスバ天の川

### 関西例会 (大阪)

森本 早苗 報

魚板打つ音新涼の建仁寺

手のしみを気にしエチュード弾く秋思

秋意充つ豆腐一丁買ひに出て

残暑続く吉川文学辞書片手

真葛野や風渡るとき秋意濃し

爽やかや木太刀を背負ふ御下げ髪

母在らば百と二十よ今日の菊

万物の疲れてをりぬ虫の音も

萬蝶

以上特選

月香

稀香

鶴城

京子

ひろこ

はるみ

佐江

星歩

マスミ

千祐

慶子

千春

萬蝶

玲子

ゆら女

洋子

和子

道子

早苗

以上特選

不知火やあやしき真夜の夢一つ  
朝まだきはつかぬ風の秋意かな  
コスモスを半眼で愛づ地蔵尊  
馬小屋の中の一頭秋思ふ  
洛中に源氏香聞く秋意かな  
新しき季寄せ買ひたり今日の菊  
みたらしに浮かぶ一葉秋意かな  
皇子の碑へ藤白坂の雲秋意  
小鳥来る掛声もるる無双窓

ゆら女  
千津子  
早苗  
玲子  
さわゑ  
満耶子  
和子  
道子

## 昔話あれこれ 32

### 『大鏡』

時代は平安中期。

場所は京都紫野の雲林院。うりんいん

菩提講（極樂往生を願つて「法華經」を購読する法会）が始まる前。

百九十歳（流布本百五十歳説）の大宅世継とその嬪。

百八十歳（流布本百四十歳）の夏山繁樹という長命な老人に聴衆の中から若侍が加わり、主に世継が歴史を語るといふ

形式で展開される。

内容は、文徳天皇の即位した嘉祥三年（八五〇）から後一条天皇の万寿二年（一一二五）まで十四代、一七六年間の宮廷の歴史を、特に道長の栄華を中心に語られる。

構成は、序、帝紀、列伝からなる。

\* 帝紀については、天皇の生年。父母、在位年数など比較的簡潔に書かれている。逸話らしい記述は少ない。それで、大臣列伝の中からいくつかの逸話を拾ってみる。

### 大臣列伝

#### 藤原冬嗣

文徳天皇の外祖父。

文徳天皇の即位前に死去したが、文徳天皇即位後太政大臣を追贈された。

#### 良房（冬嗣二男）

藤原氏が初めて太政大臣・摂政。

子がいなかったのが気の毒である。

#### 良相（冬嗣五男）

長良（冬嗣長男）

※昇進の途では、弟たちに後れをとったが、その子基経が良房の猶子となり藤原家の正嫡となったので、血筋としては正統の祖となる。（新編古典文学全集）

#### 基経（長良三男）

光孝天皇の母上（沢子）は、基経の母（乙春）と姉妹であった。それで基経は幼少期から光孝天皇を親しく拝察し、何かにつけ人柄が御立派だと思っていた。

#### 光孝天皇のさり気ない心遣い

左大臣良房公の大饗宴の時の事。

その日、時康親王（後の光孝天皇）も出席されていた。大饗には、雉の足を盛る習わしであったが、どうしたわけか御正客の膳に雉の足がなかった。慌てた給仕の者は時康親王の雉の皿を取って、尊者の前に置いた。時康親王は、御自分の前の燭台の火をそとと掻き消した。基経公はその頃身分が低く、末席にいたが、それを見て「素晴らしいお心遣いだな。」とますます感服した。

（つづく） 丸山マスキ

各地句会



光が丘俳句教室 (東京)

子規の忌の根岸の羽二重団子かな  
天仰ぎ一句待ちをる子規忌かな

はる  
理恵

水明鬼石句会 (鬼石)

秋の蛇五十男の慌てぶり  
青々と光の中のかなつめの実  
老犬に歩み合はせて星月夜

和子  
ナヲ子  
聡子

りそな俳句会 (浦和)

秋の灯やルーペ片手に江戸古地図  
枝豆や愚痴る同期の泣き上戸  
秋の灯に歯抜けおやぢの笑ひ顔  
隣家の密談秋の灯を揺らす  
秋の灯よ俯きて行く影ひとつ  
秋ともしローカル線の車窓かな  
拓本の文字の解説秋灯下

マスマ  
暦文  
建治郎  
道を  
久美子  
寛治  
雅夫

野菊の会 (与野)

法要の寺領風生む萩白し  
カウベルの遠近花野より戻る  
秋晴やカメラの並ぶ時計台  
蕎麦咲いて巡礼道の風やさし

美代子  
和子  
清子  
光子

青みかん通りゆく人見守りて  
山の木々個性を放ち秋の色  
秋色や写楽ゆかりの寺の道  
芽吹句会 (浦和)  
千支の「卯」の文字うすれゆく秋扇  
踏み入りて甘き風吹く大花野  
秋の夜や高座の落語しみじみと  
遠ざかる少女の笑顔花野道  
雲切れて褥とおもふ大花野  
秋風を入れ高原のレストラン  
松本城の高き天守や秋の水  
ふる里は空の広さと大花野

千恵子  
公代  
幸子  
富子  
玲子  
久美子  
ひろこ  
千重子  
チアキ  
道

修

櫻蔭句会 (浦和)

川砂利を踏みて今日こそ芋煮会  
晴天の光を集め秋の川  
塗り盆に三個ころんと烏瓜  
手をほどき駆け出す吾子や烏瓜  
日の暮れて待ち伏せするや烏瓜  
奇人住む木戸に絡まる烏瓜  
入院の母は子を恋ひ秀野の忌  
石投げの二列の波紋秋の川

宏治  
文枝  
直子  
真由美  
葉子  
京子  
月を  
鶴城

青みかんみ寺に邪鬼の響め面  
湯の街の先は秋色日本海  
段段畑ころげ海へと青みかん  
早晨の透き通るべール秋の色  
海見ゆる農家の畑の青蜜柑  
丘の上のバス停風は秋の色  
木漏れ日もせせらぎも皆秋の色  
街中のブティック早々秋の色

寛治  
卓郎  
翔太  
利子  
まりこ  
順子  
徹雄  
弘夫  
君夫  
治子  
風子

櫻

由紀子  
真理  
茂子  
行雄  
美子  
多美子  
美智枝  
久美子

野分あと一番星が我を待つ  
待宵の軸の遊印「雪月花」  
御朱印の最終頁秋遍路  
進みゆく道怪しげや野分立つ  
秋澄めり心新たに捺印す  
妻子いま夕餉の頃か虫の声  
虫しぐれ融通きかぬ猫の耳  
夜中ふと戸締めり気にす虫時雨  
阿波踊腰の印籠をどらせて  
鶴を折るひと日の終り虫時雨  
虫の音や机上のランブ暫し消し

千恵子  
公代  
幸子  
富子  
玲子  
久美子  
ひろこ  
千重子  
チアキ  
道

めだか句会 (浦和)

蚊の名残道案内のぶつきらぼう  
残菊や父の手塩の白や黄や  
秋風や足取り軽くポストまで  
楽隊のジャンボリミッキー風爽か  
団子屋の坂の其の先秋の風  
ウキスキーボトルに活くる残り菊  
山稜の花の一叢秋の風  
野も崑も絶えて久しや秋の風  
漂ひて隣家の夕餉秋の風  
水明熊谷句会 (熊谷)  
月光にわが家遠退く酔歩かな  
紅萩や手を引き登る女人坂  
肅肅と鳥鷺の争ひ萩の宿  
初萩のやさしく散りし苔の上  
木漏れ日の師碑に咲き添ふ萩の花  
歩み寄る心の距離や青蜜柑  
防災日団長殿に頭中  
こぼれ萩文化塵とり出番かな

灯留 久夫 知子 敦子 六弦 月を 鶴城 はるみ 三茅 卓郎 風子 秀子 道子 燈女 栄子 徹平 茂子

白桔梗読経たゆたふ大伽藍  
風折れの秋の七草切通し  
秋の七草四・五輪さして野の心  
飛驒見ゆる峠路に湧く赤とんぼ  
赤蜻蛉杭になりたき人差指  
風格は家紋に恥ぢぬ桔梗咲く  
赤蜻蛉の群れに入れば群れ割れる  
使はない裏階段に赤とんぼ  
雛の会 (浦和)  
天高し尾根縦走の八ヶ岳  
色鳥やインク濃くなるガラスペン  
花火師のお国言葉や聞走る  
りんご剥く幽かな香り朝の膳  
ほとぼしる林檎の汁や丸かじり  
みすずかる信濃に満つる林檎の香

喜恵 マスミ 水尾 昇 恵子 史代 広子 節代 輝翠 喜恵 燈女 子アキ 公子 佐江

櫛の会 (浦和)  
天高し「やつた」「バンザイ」富士山頂  
天高し手話も一緒に大合唱  
棋士扇ぐ差し手に窮し秋扇  
天高し風神ふうと雲を掃き  
天高し夫病みて吾強くなり  
コンサート開演を待つ秋扇  
あゆみの会 (浦和)  
無造作に量る鯛や朝市女  
トロ箱に鯛満載魚市場  
鯛裂くをとこの指の刃めく  
かぶりつく鯛の腸に面歪む  
鯛焼きまるごとがぶり若ぶりて  
台風一過猫の手欲しきすぐやる課  
きざきサークル (浦和)  
過ぎし日や学寮跡の新松子  
爽涼や母の形見を着る鏡  
爽やかや少女の仕切る応援団  
爽やかに貴方はいつもお洒落好き  
新松子歳月を経し長屋門  
新松子今も残りし脇往還  
爽やかや紙の切符で乗る列車  
酒蔵の饅絵眩しく新松子

富子 文子 裕誌 あつ子 朋子 千重子 啓子 俱子 重子 山遊 藻好 啓子 光司 健司 和枝 俱子 啓子 和子

若狭水明会 (若狭)

お供への葡萄は粒の光り合ひ  
葡萄狩り土産に買ひし赤ワイン  
燕帰る命の重さ羽にのせ  
葡萄狩手伸ばす吾子を抱き上ぐる  
秋燕や鳥羽川南へ緩やかに  
燕早や帰りて村の無人駅  
追ひついて追ひ越して行く秋つばめ  
秋燕や肥立ち見送る親心  
マスカット幸せ色を放ちけり  
船虫や一歩一歩に道をあげ  
送り火にまた会ふことを祈りけり

蘭の会 (浦和)

法師蟬手話の伝ふる核なき世  
谷さやか瀬音まとひて風渡る  
爽やかに喉越す蕎麦の腰と角  
爽やかに風は甲斐より信濃より  
爽やかに浅草六区の啖阿売  
法師蟬私はメゾで声を張る  
鳴きつくす声遠くなり法師蟬  
法師蟬幌をたたみし乳母車  
爽やかな笑顔に隠す拳かな  
爽やかに高原撫づる雲と風  
法師蟬力のかぎりわが坂を

初花 郁子 八重子 登美江 保人 ことは 祥子 和風 寛久 白鷺

つくつくしくつくつぼうしをしいつく  
週末の一番札所法師蟬  
輪唱の楽しからずや法師蟬  
若枝句会 (浦和)  
連れ立ちて煙目にしむ秋彼岸  
手を合はす君の横がほ秋彼岸  
十六夜や褪せぬ我が夢足ぶみし  
餅米と小豆の香り秋彼岸  
十六夜や老いの手習ひ照らしをり  
朝ぼらけ夜具を引き寄す秋彼岸  
夕さりのチャイム墓地まで秋彼岸

芙蓉句会 (浦和)

虫時雨秘蔵ぬかみそ搔き回す  
病院食の盆に月見の兔かな  
月の出を待つ人声や多賀の浜  
静けさを求め迂回の九月尽  
蛸の会 (浦和)  
暮れなづむ空まで続く蕎麦の花  
宵闇や赤色灯の回る街  
宵闇やバーガー食べて友と待つ  
乳搾る手の鮮やかや蕎麦の花  
宵闇や秩父社の酒の樽  
格安に釣られ葡萄のすつばさや

月を 鶴城 京子 美佐子 泰生 泰子 みどり 貞代 敏江 徹雄 道子 税子 美子

日本人の品格問うて花桔梗  
宵闇や主なき庭の折鶴蘭  
蕎麦の花わづかな税を納めけり  
宵闇や街の悪魔が目を覚ます  
これよりは信濃路なるや蕎麦の花  
鶴川山百合句会 (町田)  
西瓜より赤い爪以て種飛ばす  
紋付の風呂敷包む西瓜かな  
ぼつんと西瓜ぼつんと私留守番さみし  
目移りも心変りも夏の果  
種を食べたら芽が出ると兄西瓜かな  
熱の子へ西瓜一さじもう一さじ  
古里があるやうで無く西瓜食む  
やつぱりねやつぱり西瓜赤じやなきや  
西瓜食む人多ければなほ旨し  
和歌山水明句会 (和歌山)  
稲妻や尾根の鉄塔近くなる  
秋の雲特攻隊の遺書を読む  
吾亦紅名もなき山を優しくす  
観月や色無地を着て供花用意  
鯛や僧より「ん」の字いただきぬ  
褒め言葉もらひつ掬ふ新豆腐  
野仏をはんなり飾る彼岸花  
東西の雲せめぎあふ残暑かな

しるく 英子 月を 鶴城 宣子 雄二郎 月を 史代 千春 萬蝶 理恵 美千子 玲子 和子 道子 千枝子 千世子 満耶子 さわゑ 洋子 廼代

水明澤つくし句会 (大阪)

身辺に搜す句材やかな女の忌

太陽の塔の丸顔小鳥来る

畝りつつ秋へ秋へと銀の波

活き餌なるこほろぎ恋をよもすがら

野ばらの会 (浦和)

秋桜黒姫山の裾野映ゆ

コスモスの街道抜けて佐久の鯉

コスモスやほとほと薄き花びらよ

コスモスや芯に強さを秘めてをり

コーヒーの木のごんと伸びたる月今宵

山茶花 (浦和)

差して来る潮の気配や秋灯

柿手にし色艶めでて気を受くる

柿落ちてアウトアウトと啼く鴉

コクーンシテイルチャー俳句教室 (さいたま新都心)

星月夜戸締り知らぬ島の宿

朝顔や象の如雨露の鼻長し

枝豆や上司肴にガード下

秋簾入り日織り込む黄八丈

ほころびを仔猫が覗く秋簾

漁火が繋ぐ海峡星月夜

新樹の会 (浦和)

こぼれ萩夕日の中を掃かれけり

白萩や門扉はみ出し乱れ咲く

神苑の水面を滑べる穴まどひ

無住寺の土塀を撫てる萩の影

秋高し大空翔る滑空機

長き夜や脇に一九の滑稽本

参道を抜けゆく風や萩垂るる

神戸大池句会 (神戸)

天高しドームに響くカンツォーネ

秋薔薇の小さき店の顔となり

涼新た会津の名酒送らるる

俳句の手ほどき (山石槻)

靴音が宵闇を追ふ石畳

敬老の日は薔薇色の食前酒

宵闇が似合ふピアノの夜想曲

宵闇の其処だけ灯る鶏舎の灯

乙女の像に宵闇せまる湖畔かな

宵闇のジョギングの人だれだろう

宵闇へ尾灯消えゆく羽田沖

秋の日に親族揃ひお食ひ初め

宵闇や連れ添ふ影もなく独り

宵闇に犬の遠吠え気味わるし

道通

宵闇に揺るる灯影や観音堂

食み跡にしるす生き様下り鮎

宵闇や念珠一連そつと持つ

修

道通

鶴城

風子

清吉

徹雄

玲子

千津子

早苗

延昭

佐江

水尾

義子

徹平

忠男

翔太

美子

桂子

久美子

幸代

卓郎

かつ子

山菜

更穂

光代

珪子

順子

紀子

静香

暦文

美佐尾

さいち

ミモザの会 (横浜)

佳きひとの計報届きし白露かな

秋扇つかふ若者ヘッドホン

ガラスペン使つてみたし白露の日

目を凝らす注意メールや台風来

庭下駄の足もと濡らす白露かな

ダースベーターの呼気の遙けし天の川

目力に強さ戻りぬ秋涼し

白湯に手を温めてをりぬ白露かな

久々に妻は紅さし白露かな

幸代

卓郎

かつ子

山菜

更穂

光代

珪子

順子

紀子

静香

暦文

美佐尾

さいち

栄子

由美子

玲子

慶子

亜弥子

萬蝶

詠子

史代

千春

たかなな俳句会 (川口)

秋の雲古自転車が出番かな  
町空の赤き日暮や鯛買ふ  
敬老の日自分らしさの朝の顔  
鯛焼く煙昭和の夕のごと  
曼珠沙華人は自問を繰り返す  
大漁旗岬を指して鯛船  
かけつこの順位は聞かず雁渡し

柿の木塾 (浦和)

秋蝶や高原にある美術館  
太極拳なべてなだらか大花野  
点景の牛動かざる大花野  
真つ直くには歩けぬ花野抜けられず  
花野抜け裾にまつはる種の数  
木道のからりと乾き花野かな  
真つ直ぐに歩いて行こう花野道  
秋蝶よ我はこれからお洒落して  
飛びながら小草に群るる秋の蝶

若鮎句会 (浦和)

新涼や目覚めて白湯の旨きこと  
一隅にゐて鈴虫の小宇宙  
縫ひ針に通らぬ糸や月鈴子  
鈴虫や通信衛星飛ぶ宇宙  
新涼や雨後晴天の街の色  
松の葉に止まる雨粒涼新た  
鈴虫の隅田のほとり木歩の碑  
数ふたび鈴虫減りて腥き

謙一 義美 鶴城 水尾 静香 節代 惠昇 章嘉 かつ 俊晴 和葉 和子 順子 紀子 さなえ 芳春 ひとみ 秀子 稀香

鈴虫や無言で祖父のくれしもの  
新涼や式部いよいよ濃紫  
処暑なりぬ羊羹ひとつ旅の空  
新涼や軽やかなりし流れ雲  
新調のシャツの着心地涼新た  
鈴虫や望郷の眼と竹の籠  
鈴虫の声に戯れもう一杯

拓郎 道真 香音子 貴月 鶴城 喜夫

松眺め雲を眺めて雨月かな  
ブルーライトに脳沓え沓えと夜なべかな  
新薬をむさぼる牛の涎かな  
落鮎や身勝手な愛其処彼処  
変幻の無数の鯛一と化す  
落鮎や迷ふことなき母強し  
雨の月待つ人も来ず文机  
物の怪を見てまんじりと松蘿  
黙秘とは否定せぬこと雨の月

道子 京子 翔太 拓真 静修 輝香 月翠 鶴城

誤植訂正 謹んでお詫び致します。

十月号 四六頁上段

正 勝機いま团扇の挙る応援歌

誤 勝機いま团扇の挙がる応援歌

十月号 七一頁下段

正 うりずんや鳥のおばあ<sup>○</sup>の働く手

誤 うりずんや鳥のおばあ<sup>×</sup>の働く手

水明通信

かな女忌に

小駒さち子

高校の校門に続く道で、先輩が、「長谷川かな女先生を知っていますか。かな女先生は浦和市名誉市民で、NHKにも出ている有名な俳句の先生です。新しくなった埼玉会館のホールで傘寿のお祝いをなさいました。別所沼と調神社に句碑があります。ここで、句会をしています。」と、通りかかる新入生に教えてくれました。

この先輩のひと朝限定の行動で、私たちは先生を知り、私はかな女先生を尊敬するようになりました。在学中に、かな女先生の訃報に接し、市民葬に参列した学友もいました。

令和元年の「初めての俳句教室」『水明』を知った時、先生のお宅の場所を覚えていてこの先輩に辿り着きました。

一度だけ言葉を交わし、俳句にさそってくれた先輩は、かな女先生に直接指導して頂いた水明の先輩でした。不思議な縁です。半世紀後にも、かな女先生パワーが届きました。

## 令和6年 新珠賞作品募集

水明新人賞である新珠賞作品を下記の要領により募ります。

新人登龍門の主旨をよく解されて多数のご応募をお待ちしています。

- 応募資格** 季音同人を除く同人・誌友
- 応募句** 未発表作品：15句(表題を付す)  
水明集・句会報等「水明誌」及び外部に発表した作品は不可。
- 締切** 令和6年2月末日（発行所必着）
- 応募方法** 水明12月号に応募用紙添付

選考は、新珠賞選考委員と各地句委員の選考結果を基に、新珠賞選考委員会に於て受賞者を決定いたします。

尚、誌上には受賞者の作品のみを発表します。

### 新珠賞選考委員会委員（9名）

山本鬼之介	網野月を	大村節代
石山かつ子	石井喜恵	保坂翔太
青木鶴城	日高道を	曲淵徹雄

### 各地句委員（4名）

大橋廸代	檜鼻ことは	永野史代
五明昇		



いかがですか

# 「俳句日めくりカレンダー」

令和六年の「俳句日めくりカレンダー」の三五五句の中に、また鬼之介の句が選ばれました。掲載される句は、七月十九日の「噴水を身軽な水は逃れけり」です。公園に設置された噴水をじっと見ていて、噴水の虜になった水の憐れさを感じての俳句です。

来年のカレンダーから、監修者が宇多喜代子氏から神野紗希氏に替わられてますが、選出された三六五句の一句一句に付けられた解説と暦の情報が、皆さんの作句に大いに役立つと思います。よろしければ、直接左記へご注文ください。

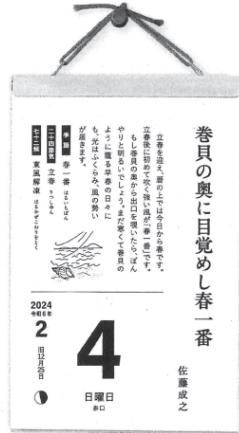
主宰 山本鬼之介

〔注文先〕

新日本カレンダー株式会社 電話 06(6971)4480(代)

# 俳句の日めくり カレンダー

2024  
令和6年



俳句の日めくりカレンダー 2024

サイズ：18.5×12cm・380ページ

〔掲載句と俳人の一覧表〕付き

監修：神野紗希

2,000円  
(税込2,200円)

※在庫数に限りがあるため、品切れになる場合がございます。

一日一句、366句を掲載。

明治時代や現代の句も、幅広く掲載。

作句に役立つ「暦」の情報。

季語、旧暦、節句や行事などの情報も掲載。

すべての引用句に解説付き。

すべての引用句に、神野紗希氏の解説付き。

送料無料！一冊からでも。

まとめ買い割引もあり、ますので「検討下さい」。

資料をご希望の方は、下記へご請求ください。



新日本カレンダー株式会社

〒537-0025

大阪市東成区中道3丁目8番11号

TEL.06-6971-4480

FAX.06-6972-5885

風 声

○現代俳句九月号——「現代俳句の風」欄

地に生まれ地に還りゆく虫時雨

井上燈女

鈴虫に穏やかな刻過ぎゆけり

岡田宣子

行く秋やハチドリに似る蜜集め

小駒さち子

文化の日平積みゴルゴサーティーン

近藤徹平

もう逢はぬことに決め霧深し

永野史代

水上の鳥居に届く鹿の声

野田静香

語り部は九十一歳敗戦忌

宮崎チアキ

まかがやく天体ドーム秋夕焼

田寺玲子

○現代俳句九月号——「現代俳句年鑑2023」を読む欄

服部きみ子氏の感銘十句抄に

夕雲雀一直線に浄土まで

日高道を

○くちら（中尾公彦主宰）九月号——「受贈誌美術館」欄

気後れの吾を励ます青蛙

鬼之介

○幻（西谷剛周主宰）九月号——「受贈誌拝見」欄

里山の穴場へ向かふ螢狩

鬼之介

○新月（松田碧霞代表）九月号——「受贈誌紹介」欄

飛魚の最長不倒距離いかに

鬼之介

○对岸（今瀬剛一主宰）九月号——「結社誌を訪ねて」欄

成井 侃氏の鑑賞により

葉桜の道をゆるりと歩き神

鬼之介

表題「歩く歩く」の中の掲句である。上五中七の描写は道に沿う葉桜を思わせる。そこをゆるゆると進む。進むのは「歩き神」さて、この神はどのような神であろうか。あるいは自称か。吟行句、囁目吟の中の一句であるとすれば自称と受け取れる。「葉桜」となれば初夏。花の頃とは異なる季節感、桜の花に対する思いを曳きながらである。新緑や新樹の頃の葉桜であれば葉陰を通して射しこむ陽光の光を強く意識するものである。桜若葉を愛でながらゆるゆる歩く吾が居る。歩き神とはおもしろい。

○太陽（吉原文音主宰）九月号——「受贈誌御礼」欄

棕櫚繩のきまる袖垣さつき雨

鬼之介

○玉梓（名村早智子主宰）九月号——「他誌拝見」欄

里山の穴場へ向かふ螢狩

鬼之介

○菜の花（伊藤政美主宰）九月号——「諸家近詠」欄

天鷲絨の袋を提げて青葉寺

鬼之介

○翎（山本一步主宰）九月号——「受贈誌の一句」欄

本籍はダムの底なり虹かかる

梅澤輝翠

（日高道を抄出）

水明発展基金御礼 (敬称略)

— 令和五年九月三十日現在 —

多根敏江	8	反町 修	2
山戸美子	3	星野和葉	1
由良ゆら女	20	田中章嘉	1
嶋田洋子	5	松井由紀子	1
山口富子	3	梅澤佐江	2
山岸久美子	3	秋谷風舎	5
りんどう忌より		熊倉千重子	2
山本鬼之介	3	森川義子	1
大村節代	2	野田静香	2
丸山マスマ	2	矢作水尾	10
石山かつ子	2	大塚茂子	2
曲淵徹雄	1	越田栄子	2
石井喜恵	1	岡田宣子	1
保坂翔太	1	西幅公子	2
日高道を	3	綿引まりこ	1
小林京子	1	五明 昇	2
梅澤輝翠	2	合計	97
	口	口	口

特集 述志の俳句

対談 句を生きる、句に生きる

長谷川 權・坂井修一

巻頭作品10句

藺草慶子・伊藤政美・柏原眠雨  
古賀しぐれ・辻 恵美子・遠山陽子  
村上鞆彦・森田純一郎

俳壇

12月号

11月14日発売  
定価900円(税込)

巻頭エッセイ  
マブソン青眼

八木健選 滑稽俳壇

四季巡詠33句 [第Ⅲ期] …… 松尾隆信

特別作品30句 …… 陽 美保子

俳人の住む町 …… 中川雅雪・加藤耕子  
俳句文法 そのが問題、そのがポイント …… 井上泰至  
名句のしくみと条件 …… 坂口昌弘

私の本棚・私の一冊 …… 坂本宮尾  
十二か月添削教室 …… 前北かおる

俳句と随想12か月 井上論天・清水和代

## 後記

長谷川かな女初代主宰を偲んで「りんどう忌」が、去る九月二十九日にさいたま共済会館で開催されました。本号に越田栄子氏が当日の様様を報告して下さいました。

所用があつて、近くのさいたま市立南公民館に行きました。ロビ



ーに「長谷川かな女」という一角があります。館長さんに伺うと、「倉庫にこの資料があるのを見つけて、もったいないから飾つたのです。」という事でした。

思い返すと、今から六、七年前でしょうか、南公民館の昔の新聞に、かな女先生の新発見の句が載っているの、公民館の文化祭に他の資料もお寄せ下さいと当時の館長さんからお電話がありました。星野光二前主宰がお届けになりました。

南公民館はその昔、「南句会」を、かな女先生が指導されていて、大畑南海魚、福岡浪子、広瀬とし、篠崎とし子といった今は亡き水明の大先輩達が、かな女先生を囲んで句会をなさり、公民館報に句会報が掲載されていたようです。

尚、二〇一七年五月号の水明が置かれていましたので、今年の十月号も展示して頂きました。写真や資料も展示されているので、お立ち寄り下さいませ。

(節代)

今月のはてな？

小鈎 (こはぜ)

候鳥 (こうちょう)

斜張橋 (しゃちようきょう)

滑滝 (なめりたき)

熟 (こ) なれ

裂脰 (さきなます)

御食国 (みけつくに)

松蘿 (さるおがせ)

華麴 (はなこうじ)

### 水明発行所受付時間

(048-822-4741)

曜日：(月・火・水・木・金)

時間：12時半～午後4時半

(土・日・祭日は休み)

水明の行事と重なった時は休み

(上記の時間には係がおりますので、

ご用の方は 時間内をお願いします。)

85 84 44 31 30 26 25 24 頁

## 水明

令和五年十一月号

通巻一一八号

令和五年十一月一日発行

発行所

水明俳句会

〒330-0064 さき、たま市浦和区岸町四一〇一二

電話 048-822-4741

ホームページ

「水明俳句会」で検索

誌代 半年分 六、〇〇〇円

一年分 一二、〇〇〇円

同人費 (誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費 (誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇一〇一九三九三

発行人 山本 鬼之介

印刷所 中央美版











山紫集

二月号 十二月二十五日締切

十二月の兼題 「大根引」 (傍題可)

投句対象者 同人及び季音同人「花欄」「月欄」

氏名 (俳号)


※最上部の枠から間を開けずに楷書でお書きください。

(注意) この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所

氏名

年齢



## 季音抄

山本鬼之介

萩の風纏るる蝶を道づれに  
一片の雲を見送る秋簾  
したたかに繋ぐ命やこぼれ萩  
鶴を折るひと日の終り虫時雨  
言の葉の熟れはいまだ星月夜  
瓶底に円錐の見ゆ天の川  
束ぬれば沈金の艶秋の草  
うつすらと風のかたち秋の雲  
銀浪や一つはウルトラマンの星  
隻眼となりてなほ澄む今日の月  
一村は過疎化に耐へて蕎麦の花  
秋時雨相合傘に男ども  
追憶の「ゴンドラの歌」秋の夜  
萩枝垂る金剛杖ときざはしに  
秋めくや一木の影礎を占む  
衣魚ひとつ父の形見の日章旗  
四段目の小鉤残して秋裕  
母の日や母の箆筒の母子手帳

森本早苗  
矢作水尾  
山中みどり  
柚木治子  
由良ゆら女  
網野月を  
大場順子  
池田雅夫  
正木萬蝶  
松井由紀子  
高島寛治  
渡辺舍人  
日高道を  
青木鶴城  
曲淵徹雄  
保坂翔太  
河野はるみ  
檜鼻ことは

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

### ▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内  
(句に雑誌名、句集名、刊行月を付す)

### ▼散歩道へ身辺トピック▼

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内  
(題をつけて)

### ▼山紫水明へ随筆▼

テーマ：自由  
枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

# 水 明 抄

山本鬼之介

水盤の余白が語る華の道  
 国憂ふ大化以来の極暑かな  
 炎天や深呼吸して扉押す  
 手開きの鱗の骨の美しき  
 新豆腐験の兄の三回忌  
 下町の路地に昭和を葎簾  
 回廊に細き西日を連子窓  
 敗戦日あの日おかつばわらざうり  
 入相の遠き鐘の音桐一葉  
 やは肌をさらす岩風呂盆の月  
 健陀多や今日ふたびの蜘蛛に会ふ  
 菩提所の鐘は戦後派敗戦忌  
 桐一葉一期一会の意味深し  
 空蟬のなほ爪立つる掌  
 鈴虫の籠膝に置く銀座線  
 あの時のまた来る期待走馬燈  
 鉄びんの湯はまるやかに秋の茶屋  
 秋旱火傷の庭木いとほしく

菅原真理  
 小林京子  
 越田栄子  
 梅澤輝翠  
 新曆文  
 岡田宣子  
 池田珪子  
 清水桂子  
 反町修  
 篠崎紀子  
 丸屋詠子  
 菅原卓郎  
 千坂平通  
 本橋稀香  
 森下山菜  
 皆川更穂  
 山岸久美子  
 西幅公子

水明例会案内	句会名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	茂木和子 境延昭
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中みどり 青木鶴城
	第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	椎野美代子	境延昭 石井喜恵
	第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
	若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化(セ)	大橋勉代	森本早苗